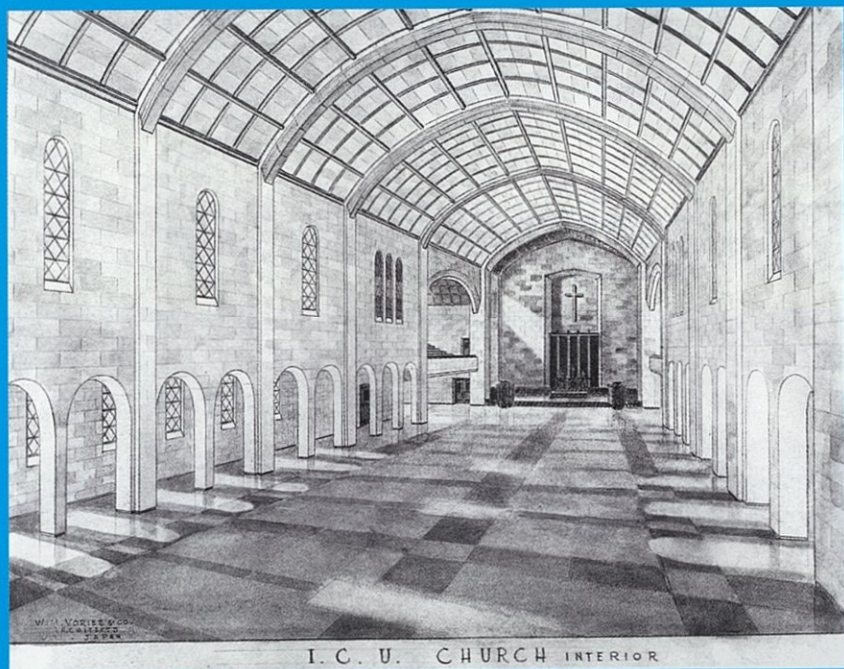


Issues of ICU

Volume 4

ICUのキリスト教理念

The Christian Ideals of ICU



ICUのキリスト教理念検討委員会
最終報告と解説

The Final Report and Explication of
The Committee for the Study of ICU's Christian Ideals

International Christian University

表紙図：W. M. ヴォーリス(ヴォーリス建築事務所、現在、
一粒社ヴォーリス建築事務所)によるチャペルのデザイン
スケッチ(1950年頃)

Cover Illustration: A design for ICU Church by W.M. Vories
& Co. Architects (c1950)

ISSUES OF ICU

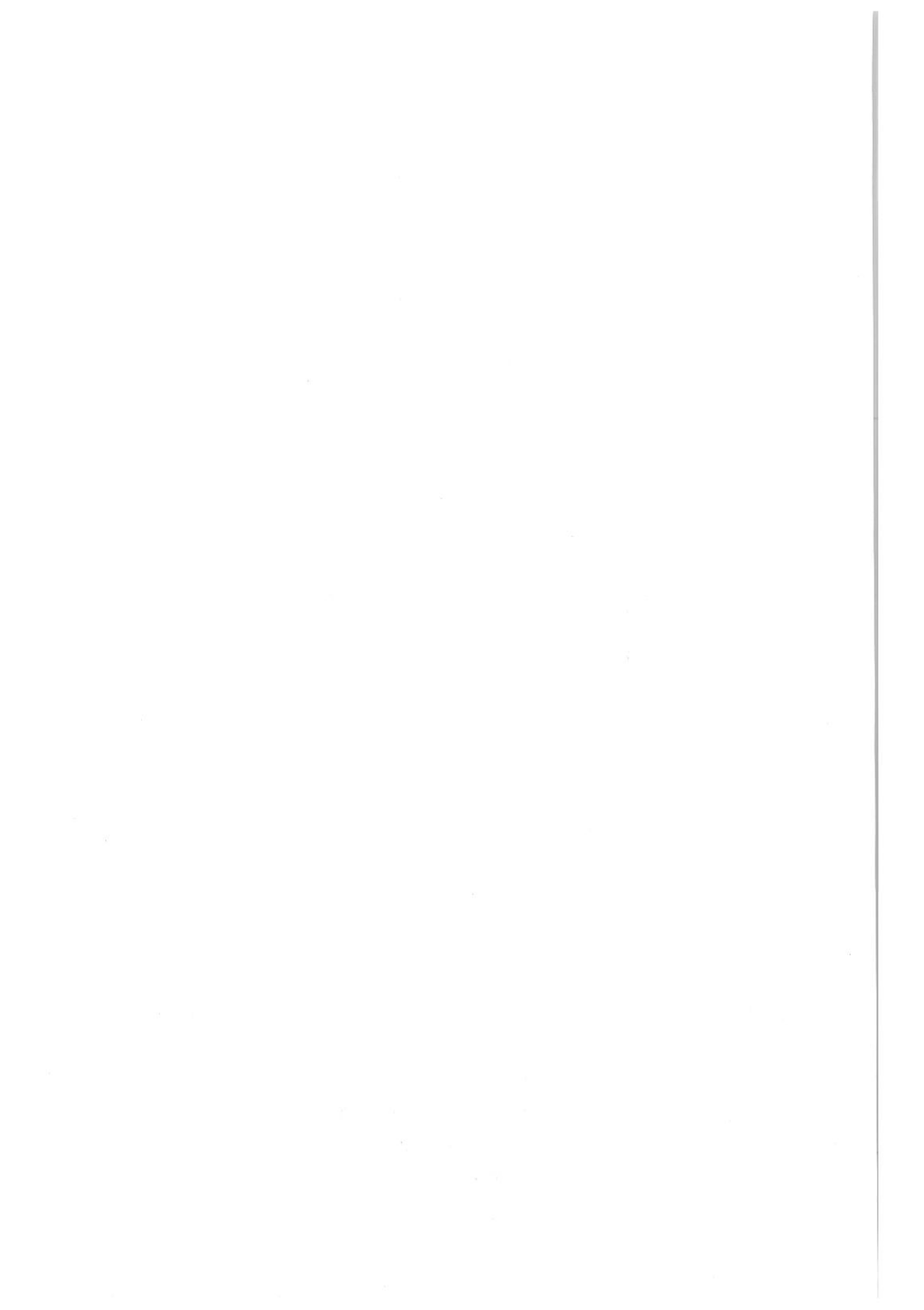
Volume 4

ICUのキリスト教理念
The Christian Ideals of ICU

International Christian University

Tokyo, Japan

December, 2003



“ISSUES of ICU” 創刊のことば

2003年にICUは開学50周年を迎える。この記念すべき時を迎えるに際して、ICUは自らの原点を再確認して、新しい世紀におけるその使命を銘記しなければならない。

周知のようにICUの理念とその実践は日本社会における実験であり、今日も実験は継続中である。それを有効に遂行するためには、ICUは自らの歴史と現在の諸問題を絶えず確認し、討論を重ねつつ前進する必要がある。その課題に答える一助として、ここにシリーズ「ISSUES of ICU」を創刊する。本シリーズはICUの先人が残した貴重な歴史的資料を復刊するが、ICUの今日の課題を見据えて未来を展望した今日の関係者の論説をも紹介する。これらが本学の構成員において省察材料として役立つばかりでなく、本学に関心と期待を寄せて下さる学外の多くの方に対しても、いささかなりとも寄与できるならば幸いである。

2002年12月25日

学長 絹川 正吉

“ISSUES of ICU” 刊行予定

- 1.* Hachiro Yuasa, et al. “The Ideals of ICU”
- 2.* 長清子『ICUと世界人権宣言』
- 3.* 川田殖ほか『ICUの理念の成立と現実の諸問題』
- 4.* 『ICUのキリスト教理念』(ICUのキリスト教理念検討委員会報告書)
5. 並木浩一『キリスト教は大学においてなお意味を持ちうるか』
6. Hallam C. Shorrock, Jr. “The prewar legacy and postwar epiphany of ICU”
7. Delores J. Roeder “Ruth Louise Miller: Woman of Faith and Dedication”

(*は既刊、以下続刊)

目次

『ICUのキリスト教理念』公表にあたって	9
----------------------------	---

最終報告

はじめに	11
前文	12
1. 国際基督教大学創立と「キリスト者条項」.....	13
2. 教育者・研究者の役割と「キリスト者条項」.....	15
3. 学問共同体のアイデンティティーの 表明としての「キリスト者条項」.....	17
4. 「キリスト者条項」維持の下での人事の原則	20
5. キリスト者教員候補者の発掘および育成.....	23
結び	24
あとがき	26

付録資料

I. 「キリスト者条項」に関する諸規程の変遷.....	28
II. 米国国内法下での「キリスト者条項」(抄訳)	31

解説

1. キリスト教大学の危機と「キリスト者条項」.....	35
2. 報告書の構成と要旨.....	37
3. 「キリスト者条項」の意味.....	39
4. Q&A	41

C O N T E N T S

On the occasion of the publication of <i>The Christian Ideals of ICU</i>	49
---	----

FINAL REPORT

Background	53
Preface	54
1. The Founding of ICU and the Christian Clause	55
2. The Role of Educator/Scholar and the Christian Clause ...	58
3. The Christian Clause as the Declaration of the Identity of the Academic Community	61
4. Principles of Personnel Management under the Christian Clause	65
5. Searching for and Nuturing Christian Candidates ...	68
Conclusion	69
Postscript	72
Appendix	
I: ICU Official Documents	74
II: The "Christian Code" Under U. S. Laws (Extract) ...	77

EXPLICATION

1. Crisis at Christian Universities and the Christian Clause ...	81
2. Structure and Summary of the Final Report	83
3. The Meaning of "Christian Clause"	86
4. Q&A	89

付記

1. 『ICUのキリスト教理念検討委員会最終報告』は、委員会事務を担当した本学宗務部より、1994年9月26日付にて小冊子の形で学内に公表された。
2. 上記の最終報告は、本学広報課(現広報センター)から1994年12月14日付けにて『ICUのキリスト教理念』のタイトルで小冊子の形で刊行された。この際に、文意が誤解なく読まれるように、若干の修文と注記がほどこされた。
3. この冊子は上記『ICUのキリスト教理念』の新装版である。若干の誤字の訂正を除き、本文には一切変更を加えていない。
4. 最終報告の正文は和文である。

Notes

1. The "Final Report" of the Committee for the Study of ICU's Christian Ideals was released for campus use by the Religious Center on September 26, 1994.
2. The booklet, *The Christian Ideals of ICU*, was the edition for wider circulation, and was released by the Public Information Office on December 14, 1994. It contains minor changes of wording for clearer understanding.
3. This booklet contains the full contents of *The Christian Ideals of ICU*. There are no changes except for a few corrections of misprints.
4. The accepted text of the Report is in Japanese.

『ICUのキリスト教理念』の公表にあたって

1994年12月14日

学校法人国際基督教大学

理事長 佐波 正一

この小冊子は、「ICUのキリスト教理念検討委員会」が本学理事会に提出し承認を受けた「最終報告」およびその「解説」を収録したものである。

理事会は同委員会委員の人選に当たっては、大口邦雄学長の進言を受け容れて、本学における行政経験、キリスト教界での指導的役割、キリスト教学の学識、国際社会および一般社会からの期待の熟知などを考慮条件として、理事会と大学の双方を代表し得る方々を委員に委嘱することとした。選任された委員(中川秀恭理事、茅野徹郎理事、松永希久夫評議員、古屋安雄教授、並木浩一教授)は、広い視野に立って本学のキリスト教理念についての学問的な検討をお願いするにふさわしい方々であった。委員会は、中川秀恭委員長の下で、書記として森本あんり大学牧師の助力を得て、活発な作業を行い、本年2月21日に「中間報告」、5月25日に「最終報告」、12月14日に「解説」を提出した。理事会はこれらを受理、承認した。

理事長として私は、この委員会の「中間報告」および「最終報告」が理事会および評議員会においてその都度熱心な討議の対象となり、建設的な意見が活発に提示されたことを特に感謝をもって記しておきたい。これほど熱心な討議が行われたことは、理事

会・評議員会の歴史においても稀なことではなかったかと思われる。なお、今秋に行われた「最終報告」をめぐる教職員によるフォーラムにおいても熱い議論が行われたと聞く。これもまた本報告が今日の大学関係者の大きな関心事であることの証しであろう。

本報告は、本学評議員諸氏を通じてすでに学外の一部の大学関係者の大きな関心事となっており、公表を望む声が本学に寄せられている。このことに鑑み、理事会は「最終報告」並びに同報告「解説」をひとつにまとめ、英訳を付して広く学外に公表することにした。この小冊子が本学と共通の重要な課題を担っている日本のキリスト教諸大学関係者各位の討議資料として、いささかでもお役に立つことができるならば幸いである。

「ICUのキリスト教理念検討委員会」委員委嘱期間

1993年7月-1994年12月

「最終報告」

1994年5月25日(定理決第94-13号)

同「解説」

1994年12月14日(常決第94-81号)

ICUのキリスト教理念検討委員会 最終報告

はじめに

国際基督教大学は、キリスト教の信仰に基づいて教育をすることを「学校法人国際基督教大学寄附行為」第3条において定め、その目的を達成するために、専任教員はキリスト者であることを原則とするいわゆる「キリスト者条項」を「寄附行為施行細則」第7条において明記している。しかし「キリスト者条項」は本学の教学規模の拡大に伴って弾力的に運用される傾向が強くなり、この条項の維持に対する批判的意見が、教員によって公的な機会に表明されるようになった。1992年、教員人事の原則の検討再吟味の必要が生じたため、理事会は建学の精神に鑑みて「キリスト者条項」を堅持することを確認した(1993年1月25日臨時理事会の決議および同年2月22日評議員会における了承)。同時に理事会は特別委員会を設置して「キリスト者条項」の再検討を行うことを決議した(定理決第92-30号の2)。そこで、同年3月17日の常務理事会はこの決議に基づいて表記5名の委員を理事、評議員、および教員中から選任した。大口邦雄学長はこれらの委員を7月19日に召集し、第1回の委員会を開催した。この委員会において中川秀恭理事が委員長として選ばれ、委員会の名称を「ICUのキリスト教理念検討委員会」とすることを定め、以後8月31日、11月19日、12

月6日、本年1月31日、2月12日、3月11日、3月29日、4月16日、および4月30日に委員会を開催、「キリスト者条項」設置の理由と創設期の事情、その後の本学における運用上の問題点、並びに今日この条項を維持すべき大学論的な論拠についての討議を重ねた。その一応の結論は中間報告として本年2月21日に開催の評議員会および理事会に提出したが、評議員ならびに理事各位の意見、および本学宗務委員諸氏の意見を検討して、中間報告に適宜改訂を行い、ここに最終報告を提出する。

前文

本学の「寄附行為」が前提する「キリスト者」とは、新約聖書が証言する信仰を認める者である。数多くの新約聖書の代表的証言の中からパウロの言葉を一箇所引用すれば、次のようである。「口でイエスは主であると公に言い表し、心で神がイエスを死者の中から復活させられたと信じるなら、あなたは救われるからです。実に、人は心で信じて義とされ、口で公に言い表して救われるのです。」(新共同訳聖書「ローマの信徒への手紙」10章9-10節)

他方、本報告が検討する「キリスト者条項」は、本学の組織体を構成する原理であり、個々人の信仰内容とは次元を異にする。もとよりこの二つの次元は切り離すことはできないが、本条項を論ずるにあたっては、両者の混同を避けることが重要である。

本条項が組織体の構成原理たりうる根拠は、上記の聖句が示すように、キリスト教信仰が単に個々人の信念に終始することなく、それを超越して公同性へともたらされることによって、はじめて現実化されるものである点に存する。キリスト者は、この信仰の公同性に基づいて共同の目的を文化的に表現する組織体を創造することができる。キリスト教大学の建設は、かかる文化創造の一

例である。本学における「キリスト者条項」は、キリスト教信仰の持つこの組織体形成の伝統に根ざすものである。

1 国際基督教大学創立と「キリスト者条項」

学術的に第一級のキリスト教大学を日本に建設することは、日本と北米双方の高等教育に携わるキリスト者たちが二十世紀の早い時期から抱き続けた夢であった。第二次世界大戦はこの夢の実現に向けての歩みを中絶させた。しかし悲惨な戦争に対する双方の深刻な反省と次の世代に対する責任感覚とは、日本におけるキリスト教大学建設の夢を復活させて、新たな使命をこれに与えることになった。この新しいキリスト教大学の構想の発表後、日米加のキリスト者たちの建設運動はにわかに活発化し、この大学を担うことになる創立者たちが結集した。大戦後の状況の下で、創立者たちは、明治以来の富国強兵を目指す和魂洋才的教育に対する批判と反省に立って、新しい世界の建設のために指導的役割を果たす人物を育成し、国の内外に向けて送り出すことを、新たに設立されるべき大学の任務として見定めた。

この新大学設立の構想は、幸いに内外の非キリスト者をも含む多くの人々の熱い支持を得て、募金活動および構想の具体化が進み、第二次大戦終結後8年目の1953年に、本学は大学院レベルの研究をも視野に入れたりベラル・アーツ (artes liberales) 大学として開設された。本学に課せられた上述の任務は、「キリスト教の精神に基づき、自由にして敬虔な学風を樹立し、国際的教養と民主的社會人としての良識を有する良心的人材を育成する」(国際基督教大学設置要項) という創設の目的として表現された。この目的は、「国際性」、「キリスト教精神」、「高度の学術性」という三つの

使命に具体化され、「国際基督教大学」という本学の名称となって明示されている。

この建学の精神を実現するために、教員は国際的見地に立ち、高度の学術的能力をそなえ、かつキリスト者としての自覚を持つことが必要であることを、創立者たちはみずから確認した。この最後の原則が「キリスト者条項」として打ち出されたのである。日本の私立大学、とりわけキリスト教大学は、明治以来、官学偏重の文教政策において不利な状況に置かれてきた。多くのキリスト教大学にとって、第二次大戦後の時期は大学としての体裁を整え始めるだけで精一杯であった。その中で学術的にも第一級のキリスト者によって教員をそろえるという本学の試みは、すでにその時点で新たな文化創造への冒険にほかならなかった。もちろん、このヴィジョンは、明治以来日本に建設されたキリスト教大学の創立者たちが等しく懐いたものであって、本学の独創ではない。しかし、それらの大学の創立当時の高邁な理想は、大学としての整備の過程で妥協を強いられ、後退に後退を重ねて現在に至っている。「キリスト者条項」の原則を今日もお維持することは、日本のキリスト教大学建設の冒険を依然として継承するという決意の表明にほかならない。

本学が掲げたかかる理想のゆえに、国外から学術的にも人格的にも優れたキリスト者教員が来日され、国内からも、国立大学での定年を待たずに本学の建設に参加するキリスト者教員が現れた。その中には、世界的に名声ある神学者 E. ブルンナー教授の如く、チューリヒ大学をはなれ、また教義学著述のライフワークを中断して来日し、本学と日本の将来のために犠牲を払われた方もおられた。これら先達の多大な貢献をもとに、本学の冒険は遂行されたのである。さらに特筆すべきことに、本学では次代の学問と教育を担う若手のキリスト者教員を育成する努力が設立当初から払

われていた。この努力は発展を遂げた今日においても、本学が自覚的に継承すべき重要事である。

2 教育者・研究者の役割と「キリスト者条項」

本学の教員がキリスト者であることは、本学の教育の実践と深くかかわっている。本学は、創設に際して教養学部の道を選び、今日においてもこれを本学の基礎としている。教養学部は、幅広い知識の習得だけを目指すものではなく、また単に言語能力に秀でた国際人の育成だけを目的にしてもいない。本学の教養学部が第一に目指すのは、個々人が利己追求に走る人間の本性を認識し、自己に制約を課することのできる批判的な知を身につけること、また自由の世界の建設に向けて努力する人格性と豊かな人間性を涵養することである。神と隣人との交わりの中で生きる人間性の確立なくしては、科学技術や学問の発達も人間の利己的な自己実現の欲求に屈服するほかはない。本学はこれまで国際的な教育環境の形成を目指してきたが、文化や言語を異にする人々の間に真のコミュニケーションを創造して実りを得るためには、人間の真実・愛・信頼・謙遜の実践を欠くことができないことを明確に認識してきた。かくして、本学の教養学部教育は、人間の現実に対する厳しい反省的な知とともに、隣人を受け容れる精神を要請する。その精神の根拠こそイエス・キリストにおいて示された神の義と愛である。

本学は創立以来、この姿勢がカリキュラムや宗教活動にも反映されるよう努めてきた。しかし本学はそれと並んで、教師と学生、あるいは学生相互間の、教育・研究・生活のあらゆる面にわたる人格的な出会いの中で、この教育目標が達成されることを期待してきた。教員の学内居住および全寮制の理想は、この期待に基づ

くものであった。本学の教育は決して教室や礼拝堂に限定されるものではなかった。むしろ本学は、学術的であり国際的であると同様に、キリスト教的エートスが鮮明な学問共同体を築き、その共同体に教師も学生も参加することを通して、教育の理念が実現されると考えてきたのである。本学が単なる学問追求の場であれば、今日におけるようなキャンパス・コミュニティの形成は必要なかったはずである。そのような場は、高度の学術に携わる学者集団を形成すれば足りるのであって、教員の人間性はそれほど問われないですむであろう。また本学が単なる国際交流の場であれば、宗教的にも多様性をもった集団の編成が求められるかもしれない。しかし上述のような本学創立の理念の実践には、教員がキリスト教的人間理解とキリスト教信仰の積極的評価を共有することが必須である。このゆえに、本学は「キリスト者条項」を堅持するのである。

加えて、「キリスト者条項」について見落としてはならないのは、学者としての教員の姿勢の自己規律の問題である。学問は知的探求の営みであるゆえに、批判的精神によって支えられなければならない。しかし、大学においては個々人の研究業績が争われるために、往々にして優れた研究業績を持つ者は、自己の能力への過信と独善的な振る舞いに陥り易い。そこからさらに他者への不信、攻撃的な言動、閉鎖的な姿勢が生み出されるのである。それゆえ知的批判が学問を営む本人のありようにも振り向けられることなしには、真に学際的かつ国際的な学問共同体を築くことができない。自己規律に基づく学問共同体の形成は、本来どの大学においても志向されるべき事柄であるが、人間の知的高慢がその実現を阻むものであることを大学人はこれまで等しく体験してきた。その実現のためには、個々の教員が自己の限界を超越者の前で自覚することが必須である。この点で本学の「キリスト者条項」は、根

源的な自己規律の手がかりである。それは、学問に由来する諸々の権威から教員個人々人を自由にする根拠としても、本学が失ってはならない大学としての存立条件である。

教員の自由な行動が重んぜられる大学においては、学問共同体に対する教員の主体的なかかわりを尊重しており、学生に対する指導にも教員の自由な判断と行動が重んぜられる。これが教授会自治の実質的な基盤であって、本学建学の理念はこの教授会自治の精神の徹底を目指している。それだけに、教員に求められる自己規律は、他の職業倫理の水準を超えて一層厳しいものでなければならない。その結果として本学の教員個人々は、学者としてのみならず、キリスト者としての良心に基づいて行動し、自己の過ちには謙虚であり、相互の信頼を重んずるという高度の人格的な自律性を獲得することができるのである。本学における「キリスト者条項」は、本学教員の自己規律と自浄努力の可能性の根拠として、今日まで重要な役割を果たしてきたことを、ここで特に指摘しておきたい。

3 学問共同体のアイデンティティの表明としての「キリスト者条項」

西欧の大学において「学問研究の自由」の理念が確立するまでには、理性と信仰の長い葛藤の歴史があった。しかしこの葛藤を通して、キリスト教は、学問の場における信仰の役割を、個人々の知的活動における主体的な側面に限定することを学んだ。その結果、信仰は学問研究に対して、一つの積極的な役割を果たすことができるようになった。すなわち、信仰は神の前で自己と人間の営みを徹底的に相対化する。キリスト教信仰は、人間が自己の知的活動によって世界の支配者になることも、また反対に、学問

の中に持ち込まれる特定の価値観の絶対化による服従をも退ける。信仰は、認識対象の絶対化もしくは世界の特定部分の神格化から研究者を自由にすることによって、かえって批判的な知の形成に寄与することができる。

特定の価値観を絶対化することなく学問を行うということは、人間と社会の現実を醒めた眼で見るということである。それは、一方においては人間の悲劇的現実を直視することであり、他方においては神が世界の主であるとの信仰に基づく人間性回復の希望からこの現実を直視することである。約言すれば、人間をその悲惨と偉大の両面において認識すること、批判的精神と人間愛をもって学問を行うことである。したがって、キリスト者の学問の姿勢には大学共同体における実践に向けての関心が存している。

そもそも、知的探求の営為に対してキリスト教信仰をもってコミットするということは、価値観にかかわる一つの逆説に身を晒すことである。すなわち、価値相対主義にも自己絶対化にも陥らない価値観を保持することである。このことによって、学問自体の中に持ちこまれる価値の絶対化への批判的感覚を鋭くするのであれば、キリスト者が学問に携わるということに帰属する逆説性は学問研究に知的緊張を与え、ひいてはキリスト者としてのアイデンティティーを明確にし、世界観に関する研究者の知的交流を活発にするであろう。またそれによって各人の学問的良心も研ぎすまされるであろう。二十世紀の諸大学は、学問が国家体制や反体制に巻き込まれるときに、本来の使命を果たさず、知的対話が衰えることを直接に体験した。学問研究者に知的緊張を与えるようなアイデンティティーを保持することは、将来においても大学における知的活動の活性化のためにきわめて重要である。

自己のアイデンティティーの保持が他者との知的対話のために不可欠であることは、大学においてばかりではなく、宗教や文化

間の対話の実践からもうかがうことができる。近年、文化や伝統の多元性が強調され、諸宗教の相互尊重と平和共存が主張されている。異文化・他宗教との対話は、個々の宗教や文化に生きる人々の視野を広げると同時に、自己の宗教や文化の特質と変革の必要性についての認識を深くするものである。しかしながら、異文化・他宗教との対話は、自己の立場が明確でなければ有効なものとはならない。精神的な次元における自己の存立理由の自覚、すなわち自己の宗教的・文化的アイデンティティーの保持が対話を開かれたものとなし、実り豊かなものとするのである。これが不明確のままでは、異文化や他宗教の生き方を尊重し、それから学ぼうとする開かれた姿勢を取ることもできない。本学が開かれた大学であるためには、本学のアイデンティティーであるキリスト教信仰とその文化的所産の特色を明確に自覚するとともに、自他の区別に伴いがちな自己絶対化を退けつつ絶えず批判を自己に向ける必要がある。自己批判は、自己を他者に開きつつ、自己のアイデンティティーの意味を掘り下げる精神活動であって、その解体を目指すものではない。

自己のアイデンティティーは個人が主体的に保持するものであるが、それを本学構成員の共同の組織的アイデンティティーとして確保するためには、それを一つの制度的な表現にもたらしかなることが必要である。「キリスト者条項」はこの意味での学問共同体としての本学のアイデンティティーの基盤である。「キリスト者条項」は、確かに一つの制度であるが、主体的信仰に対立させられるような客観的制度ではなく、その本質は本学の構成員の主体を規定する誓約なのである。本学に就任したキリスト者教員は、「キリスト者条項」に表現されている本学の基本理念に、自発的に賛同した者と見なされる。例外措置（「寄附行為施行細則」7条3項）として任用された非キリスト者教員の場合にも、本学に勤務するた

めに人事書類を提出した時点で、本学のかかげる理念・目的を深く理解し、課題を共に担ってゆくという自発的決意を明確に表明することが求められている。その意味で、「キリスト者条項」はキリスト者教員であると否とを問わず、本学に就任しようとする者を共通の理念における一致へともたらず原理であって、排除を目的としたものではない。

一般に、構成員が同質である場合には、誓約による団体形成の必要はなく、人間関係が構成員を拘束する。知の批判的活動と研究者の主体性の上に成立する知的共同体にとり、構成員の同質化は望むべくもなく、また望ましいことでもない。事実、本学の構成員は建学以来多様性に富んでいる。そもそも本学の設立は、国際的かつエキュメニカルなキリスト者の超教派的協力の成果であった。本学は設立以来今日に至るまで、様々な教派や立場のキリスト者の構成した団体であって、構成員の多様性はこの事実によって保証されている。

今日キリスト教は諸教会・諸教派に分かれており、互いに無益な自己主張と教条主義に陥り易い。本学のエキュメニカルな開放性は、この傾向を防御して構成員の多様性を保障するものとして評価される。「キリスト者条項」は多様性を重んずる本学の現実の中で、一致すべき目標を提示するものであり、それは多様性を前提しつつ共同の目的を目指して行為することができるというキリスト教の本質に向けての知的問いをも誘発するであろう。この点で「キリスト者条項」は大字の知的活動に適う側面を持っている。

4 「キリスト者条項」維持の下での人事の原則

今日、知的先進国における世俗化が著しく進行し、キリスト教的エートスが危機を迎えている。非キリスト教国の伝統の中に置

かれている本学が、優秀なキリスト者教員を確保することは現在においても困難である。加えて、国によっては公募の条件としてキリスト者たることを掲げることが好ましくない場合もあろう。キリスト者が大多数をしめる国々では「キリスト者条項」は差別につながる危険がないとは言えないが、わが国のようにキリスト者がきわめて少数であり、差別視されている社会では、「キリスト者条項」を保持することはむしろ信教と思想の自由を守る決意を示すものである。もっとも、キリスト教文化の長い伝統を持つ国で育った研究者は、キリスト者としてさしたる自覚を持たなくともキリスト者であると自称することができること、逆に、わが国におけるようにキリスト者としての自覚が強い場合には、知的客観性とのバランスがしばしば失われていること、あるいはキリスト教に深く関心を寄せつつも受洗を潔しとしない良心的な研究者があること、総じてキリスト者としての自覚がしばしば主観的であることなど、問題となる点が多い。それにもかかわらず「キリスト者条項」を維持するのであれば、困難を覚悟の上で現実に対応する方策を立てることこそが肝要であって、安易に世俗化に追従するような方策は取るべきではない。

戦後、多くのキリスト教大学が教員・大学管理職・理事等に関する「キリスト者条項」を撤廃してきたが、今日ではそれが創立当初の教育理念を希薄化させたことに反省が向けられており、いかにして後継者を育成するかが各大学の急務として考えられている。そうした事情に鑑みると、本学における「キリスト者条項」の再確認はまことに時宜に適うものであると言わなければならない。「寄附行為施行細則」第7条3項には本学行政職に対する「キリスト者条項」の適用がうたわれているが、学則上の行政職員ではない本学の科長職(教養学部の学科長、大学院の研究科長)も同じ扱いを受けるものとされている。学科長もしくは研究科長は、教

員の所属集団の代表者であるが、他面、本学の行政組織においては重要な管理責任を担う者であり、この後者の意味づけにおいて科長職に対する「キリスト者条項」の適用が行われている。管理職の任命は組織体の姿勢を表示するものであり、本学の場合にはその任命の都度、建学の精神を確認するという意味を持っている。しかし本学の構成員がすべて本学の精神に賛同した者であるとの認識に立つならば、管理職の任命における「キリスト者条項」の適用はキリスト者と非キリスト者の双方において緊張を生ずるとしても当然である。この緊張においてキリスト者教員は自省を促されて然るべきであろう。キリスト者であることは、決して特定の地位に就くための「資格証明」ではない。それはむしろ、本学の使命達成に向けての「献身」の用意を表明するものである。このような信仰の表明なしには、本学の理念は無力なものとなる。

周知の通り、本学の教育は教授会成員でない語学担当の講師などの多数の専任教員によっても支えられている。これらの教員の任用は「キリスト者条項」の適用外であるが、学生との接触を通してのこれらの教員の教育的役割および感化力にはきわめて大きなものがある。このことを考えるならば、教授会成員に対する「キリスト者条項」の存在の意味を十分に考慮に入れてこれらの専任教員の採用を行うこと、また採用の際に本学の理念の理解を得るように努力することが望まれる。

本学の使命を理解し、重荷を負うのは教員だけではない。創立当初の本学には職員全般に対して「キリスト者条項」が存在した。事実、創立の理念に賛同して参集した多くのキリスト者の一般職員がおり、職務ばかりでなく日常生活上の接触を通して学生たちに多大の感化を与えていた。今日においても一般職員が学生と直接間接に接触する立場にあることは変わらない。この面を考えると、一般職員もキリスト者であることが望ましい。今後、一般職

員においても本学の教育理念についての理解が深められること、学生と直接接触する職務を担当する職員について人事政策が検討されることを期待したい。

5 キリスト者教員候補者の発掘および育成

今日の世俗化し多元化する社会の中で「キリスト者条項」が現実的な人事原則となり得ないという判断がしばしば語られている。しかしそれは、国内外に広く人材を得るための長期的組織的計画的な努力を継続してみて初めてなされるべき判断である。現状ではむしろ、一般大学と同様に、先に雇用されている教員がたまたま知り得た情報によって人事手続きが進められるという傾向が見られる。現状では、キリスト者であり優れた学究・教育者である人々が自由に応募し採用される機会が十分に開かれているとは言い難い。したがって、「キリスト者条項」の堅持は、責任ある推薦者を伴う公募だけでなく、若手のキリスト者学徒に目を向けて、招聘の対象となり得る候補者を調査する部署の常設などの積極的施策と並行してなされなければならない。

冒頭に述べたごとく、本学は新しい時代・新しい世界に責任をもって指導力を発揮し得る前途有為な人材を育成するという日本と国際社会の期待を担って創設された。その期待に応え、とりわけ戦後の教育に貢献する人々の育成について本学は実績を示してきている。なかでも、日本国内のキリスト教学校における教育の担い手として活躍している卒業生は相当数にのぼっている。本学は優れたキリスト者教員を招くことに努力するばかりでなく、若手の優れたキリスト者教員を育成して、他の諸教育機関に送り出す役割をも強化すべきである。本学が日本国内および国外、ことにアジアの諸国に対して、大学レベルの人材の育成・提供に努め

ることが重要である。このことは多くの学外の需要を満たすことになり、ひいては本学の教育の後継者の輩出にもつながる。私立大学は今や、理事・教員・事務職員それぞれの集団において、意識的に建学の精神の後継者を育成し準備することなくしては、伝統を保持することができない。本学はそうした意味でも先駆的な教育機関としての責任を担っているとの自覚に立つべきである。

結び

「国際基督教大学・大学基本問題調査・検討委員会報告書」(1993年5月、委員長・絹川正吉教授)は、本学が深刻なアイデンティティー・クライシスに陥っているとの調査結果を明らかにした。本委員会は「キリスト者条項」の存在理由の再検討を通して、この条項が本学の使命の表現であり、教員のアイデンティティーに最も深くかかわるものであることを確認した。「キリスト者条項」の堅持が本学構成員のアイデンティティーの確認のために寄与するものであることを願ってやまない。本学の創立者たちは、前述のように、神と隣人との交わりの中で生きる人間性の確立なくしては、科学技術や学問の発達に人間の利己的な自己実現の欲求に屈服するほかはないという洞察において一致していた。この認識は二十世紀末の今日においてますます重要である。

「精神なき専門人」によって支配されるに至った人類は、二十世紀において無反省な科学万能主義に陥った。しかし、人間の知を無制約に肯定するこの科学万能主義は、人間性の著しい抑圧と文化の破壊をもたらし、人類を破滅の淵に追いやる危機を認識させた。国際基督教大学の理念は、この危機についての深刻な反省と洞察を導き、現代の新しい課題としてこれに応答することを教員・職員・学生に求めているのである。

この理念の追求のために、本学は最初に触れたようなりべラル・アーツの理想を掲げた四年制の学部を中心に据えて教育を行ってきた。それは、この理念を実行に移し教育的な成果を挙げるために考え抜かれた自己限定(アスケーゼ)の道であった。したがって、大学の規模も一定の学生数とこれに見合う教員数が考えられ、また研究と教育の範囲も教養学部の教育、および、これに直接に連動する大学院の専門教育に限定される。それは、他の総合大学が目指すような多岐にわたる専門範囲を網羅するのではなく、むしろ限られた量と範囲の中で優れた教育と研究を行うという新しい実験である。

しかしながら、本学はかかる自己限定を行いつつも、設置した領域については研究者としても教育者としても第一級の人材を備え、教養学部が本来目指しているところの専門研究の相互協力と総合を行うことにより、教育界の潮流に先駆けることとなった。本学の教養学部および大学院における教育・研究がこれまでに見られなかったような人材を社会の広い領域に送り出していることは、すでに高く評価されているところである。

この報告を閉じるに当たり、本学の「キリスト者条項」は単なる制度の問題ではなく、本学の精神に対する構成員の自発的な態度決定の問題であることを、もう一度確認しておきたい。それは構成員の本学就任時における誓約であり、その後は自己規律として働くことが期待されている。それゆえにこそ、「キリスト者条項」は例外措置によって任用された非キリスト者教員においても理解され、また賛同を得ることができるのである。事実、幾多の優れた非キリスト者教員による本学の使命への多大の寄与のあったことを感謝をもって想起する。この使命のゆえに、キリスト者であると否とを問わず、本学構成員が学問共同体の前進のために協力

することができるのであれば、「キリスト者条項」はその最も重要な構成原理である、とすることができる。

「キリスト者条項」は本学構成員のコミットメントへの問いかけである。本学においてキリスト者たることの意味も、個々人において自発的に問われ続けなければならない。そのことを抜いては本学が求める自己規律の精神を涵養することはできない。自己規律の精神は自己の自己に対するかかわりの誠実さだけでなく、相互の信頼と客観的評価を不可欠のものとする。それはまた組織体に対する責任感覚を深く養うはずであり、本学の構成員は自己にも他者にも厳しく対応しなければならない。たとえば就任後本学の基本的教育理念に賛同できないとの自覚を持つに至った場合、本学の構成員はみずから身を引く誠実さを持つことが期待される。「キリスト者条項」は、本学の積極的な構成原理だからである。本学の冒険はまだ続いている。

あとがき

本委員会の任務は、創立者たちが決断し、本学がこれまで保持してきた「キリスト者条項」の意義を、歴史と現状を顧みつつ、大学論的に基礎づけるとともに、それに伴う今後の課題を指摘することであった。

この報告を終わるに当たって、いくつかのことを述べておきたい。第一に、この報告において確認されていることであるが、「キリスト者条項」を堅持する大学共同体においては、イエス・キリストにおいて示された神の前に、教員も職員も学生も、また理事者たちも、常に謙遜になることが期待されている。さらに寄附行為に掲げられている理念によって、常に真摯に大学の営為全体を

反省せしめられ、各人の大学へのコミットメントが新たにされることが求められている。

第二に、周知の通り、「キリスト者条項」は、学内において論議の対象となっており、緊張をはらんでいるが、将来ともそのような状況が予想される。その際に重要なことは、本学創立の原点に立ち返って根本的な省察をしつつ前進することであろう。また、歴史の変遷の中であって、本学を取り囲む環境が厳しくなり、多くのキリスト教学校が経験し、本学もその一端を味わってきたように、キリスト教に基づいた教育のアイデンティティーが深刻に問われる時が来ることもあろう。しかし、まさに上記のような共同体構成員のコミットメントが生み出すキャンパス・ライフとキリスト教的エートスとが、繰返し、そのような危機的状況を乗り越えさせ、新しい道を切り拓く源泉となることを確信する。

第三に、国際基督教大学の存在は、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」(マタイによる福音書18章20節)とのイエス・キリストの約束に究極の根拠を持つ。事実、本学の創立者たちは、この約束に希望を託して新しい大学の建設の冒険に乗り出したのである。後続の者たちもこの希望を継承し、この大学の営みに参加する光栄と喜びをもって働くことができるのである。「キリスト者条項」が、いつもこの希望に奉仕するものであることを願ってやまない。

付録資料

I 「キリスト者条項」に関する諸規程の変遷

A. 「国際基督教大学寄附行為施行細則」の変遷

1) 学校法人設立当初 (1952年2月29日理事会決議、1953年4月1日施行)

第8条 職員を分けて行政職員・教育職員及び一般職員とする。

- 2 職員の任免はすべて職員採用の規定によらなければならない。
- 3 職員はその地位、職務の如何にかかわらず、すべて福音的信仰を告白する基督教信徒でなければならない。但し、事情によっては、職員採用の規定に基き例外を認めることができる。

注: 「キリスト者条項」は教育職員および一般職員に適用されていた。

2) 変更 (1968年9月28日理事会決議、1970年9月16日施行)

第7条 職員の任免はすべて職員採用の規定によらなければならない。

- 2 専任(常勤)の講師以上の教育職員は、基督者であることとする。但し、必要によって理事会の議を経て例外を認めることができる。
- 3 この規定により例外を認める教育職員の任用は、次の基準による。

- (1) 学識並びに教育経験において高く評価され、かつ基督教の精神及び大学の教育目的を理解しこれを積極的に支持する者。
- (2) 在任中大学の行政職(科長を含む)を任用しない。

注: 「キリスト者条項」の適用が教育職員に限定された。
「福音的信仰を告白する基督教信徒」が「基督者」に修正された。
例外的に任用された教育職員の基準が定められた。

3) 現行(1987年2月23日理事会決議、同日施行)

第7条 職員の任免はすべて職員採用の規定によらなければならない。

- 2 専任(常勤)の講師以上の教育職員は、基督者であることとする。但し、必要によって理事会の議を経て例外を認めることができる。
- 3 この規定により例外を認める教育職員の任用は、次の基準による。但し、これにより任用された者には、在任中大学の行政職(科長を含む)を委嘱しない。

(1) 助教授以上の教育職員

学識並びに教育経験において高く評価され、かつ、基督教の精神及び大学の教育目的を理解し、これを積極的に支持する者。

(2) 講師

本学において教育職員の経歴をもち、かつ、基督教の精神及び大学の教育目的を理解し、これを積極的に支持する者。

注: 教授会成員を助教授以上に限定したため、例外的に任用される教育職員を助教授以上の教育職員と講師に区分した。

B. 「国際基督教大学専任教育職員の任用に関する規程」の変遷

1) 制定当初 (1961年6月21日制定)

第3条 教育職員は、この大学の目的と計画とを深く理解し、その遂行に積極的信念を有する基督教信徒で、次の各項の資格あるものの中からそれぞれ選任する。ただし講師以上の教育職員で、理事会が特に基督教信徒でないことを認めた上で選任を決議したもの及び助手についてはこの限りでない。

2) 現行 (1987年2月23日)

第3条 教育職員は、この大学の目的と計画とを深く理解し、その遂行に積極的信念を有する基督教信徒で、次の各項の資格ある者のうちからそれぞれ選任する。ただし、講師以上の教育職員で、理事会が特に基督教信徒でないことを認めた上で選任を決議した者及び助手については基督教信徒であることを要しない。

C. 「国際基督教大学専任教育職員の任用に関する規程の特例に関する内規」 (1987年10月19日制定、現行)

- 1 特に任期を限って任用する専任の講師 (以下「特任講師」という。) 又は助手の任用は、専任の講師に欠員のある場合に限る。
- 2) 専任の講師の欠員を特任講師又は助手で充当する場合は、学科長が学務副学長と教養学部長の承認を得て科長会議に提案し、幹部会の承認を得て決定する。
- 3) 特任講師及び助手には基督教者条項を適用しない。

注: 「特任講師」制度の発足に伴う内規

II 米国国内法の下での「キリスト者条項」(抄訳)

December 20, 1993

カワチ外国法事務弁護士事務所

I. ICUは、日本国内で「キリスト者条項」を有することも、また米国内で「キリスト者条項」による教員募集をすることも自由であって、法律的に何ら問題はない。

ICUは米国外の雇用者である。「タイトルVII」は米国外の雇用者が米国外で雇用する米国人には適用されない。同項はまた、米国外の雇用者が米国内で同様の限定的な募集をすることも妨げない。

なお、ICUがUCLAなど米国の大学と客員・学生の交流をもつ場合には、「キリスト者条項」をUCの教員に適用することは好ましくないが、その交流自体はUCがICUに支配力を持たない以上、問題となることはない。

ただし、ICUの米国事務所では、「キリスト者条項」を適用しない方が賢明である。「タイトルVII」は15人以上の雇用者がある団体にのみ適用されるが、ICUの米国事務所はICUとの連合雇用団体であると解釈される余地があるからである。

II. 仮にICUが米国の市民権法のもとにあると仮定した場合には、結論は現時点ではどちらとも言い難い。

最近問題になった「カメハメハ校事件」は、限定された地域での法律判断であり、法曹界では批判的な意見も多

いので、これを結論とするには時期尚早である。同校とICUとは諸条件が異なっており、また最高裁への裁量上訴棄却も、下級裁判所の判決を支持してのことではなく、最高裁が判断するほどの普遍性を有する事件ではないと解釈されたと考えられる。

「タイトル VII」の適用除外対象となるためには、主として以下の4つの道がある。

- (i) 「宗教的な教育団体」として認定されること
- (ii) 宗教が明白に職業上の資格要件のひとつとされていること
- (iii) 宗教団体によって所有・運営されていること
- (iv) 宗教教育を主眼とする教科課程であること

ICUは明らかに (iii) でも (iv) でもない。また「キリスト者条項」は特定分野ではなく全学に適用されているので、(ii) も該当するとは考え難い。しかし (i) についてはICUは説得力のある根拠を有している。

1. ICUは、主としてキリスト者により、特にキリスト教的な目的をもって設立された大学である(カメハメハ校は世俗団体によって創設された初等中等校)。
2. キリスト教週間や大学礼拝があり、オープン・ハウスなどで非キリスト者の学生がキリスト者教員と経験を共有することなどを通して、実際にキリスト教に回心する者もある。
3. 日本社会で少数者であるキリスト教には、より大きな法的保護とより自由な裁量が認められてしかるべきである。理事、教員、行政職員がキリスト者であることや、学校がキリスト教的な行事を行うことも、米国において一般的慣習としてなされる場合よりも大きなキリスト教的内実があると考えられる。

ただしこの点は、どこの裁判所が扱うかによって、なお予断のできない部分が残る。

註 「タイトル VII」

「市民的権利に関する法律の第7編」は、州際通商に関連する労働関係において、使用者、労働組合、あるいは職業紹介機関による、人種、皮膚の色、宗教、性別、出身国や民族を理由とする差別的な取扱いを禁止し、そのための救済機関として「平等雇用機会委員会」を設置した。ただし、職業上、業務上必要な「真正な職業要件」であることが客観的に示されれば、宗教、性別、出身国や民族を条件とすることが許される。

— 『英米法辞典』田中英夫編(東京大学出版会、1991年)より

ICUのキリスト教理念検討委員会 最終報告 解説

1 キリスト教大学の危機と「キリスト者条項」

「ICUのキリスト教理念検討委員会」(以下「委員会」と略称する)がその「最終報告」(以下「報告書」と略称する)を作成するに至った本学における事情については、「報告書」の冒頭に記されているとおりである。専任教員がキリスト者であることの規定(「報告書」ではこれを「キリスト者条項」と呼んでおり、以下この表記に統一する)が本学教員間において賛否が最も分かれる状況を招いたことは、本学におけるキリスト教大学の理念の危機の一つのあらわれであるが、本学以外の多くの日本のキリスト教諸大学の状況はさらに深刻である。規模の大きなキリスト教大学においては、今日キリスト者教員が教員全体の中で占める比率は1割程度もしくはそれ以下に減少し、甚だしきはひとりもキリスト者教員が存在しない学部すら見られるという状況である。大学運営の要の職務に就く学長ですら、キリスト者を選任しない大学も少なくない。また教員候補者がキリスト者であることを隠す必要のある学部すら存在するという。キリスト教諸大学の内的危機は深く進行している。

キリスト教諸大学におけるキリスト教理念および「キリスト者条項」の著しい後退の背景には、いたずらに大学規模を拡大化し

たという大学経営の問題がある。その結果、多数の優れたキリスト者をもって教員集団を構成することが困難となった。こうした事態に反省を加えることもなく、キリスト教理念を維持しようとする熱意そのものが後退していったところに、さらに根本的な危機が存している。これに拍車をかけるのが現代の世俗主義の浸透であり、また文化相対主義や差別批判に基づくキリスト教的価値観の相対化である。この時代感覚が「キリスト者条項」の存在理由を疑わしめるのである。加えて「キリスト者条項」の便宜的な適用は学内に大きな弊害をもたらすこととなり、誠実な大学人の批判を喚起することとなった。

本学は「キリスト者条項」を原則的に維持してきた点でキリスト教諸大学の中では異例であるが、その本学においても、現代の価値観の変動とこの条項の安易な適用による弊害に基づく批判論を無視することはできない。それゆえ「報告者」は、これらの現実的および思想的問題を十分視野に入れつつ、現代のキリスト教大学の危機の中で、なお本学におけるキリスト教理念を維持すべき積極的な理由を見定める作業を行なった。

この報告書はその作業の結果を示したものである。本学においては大学のキリスト教理念が公的場所で、また私的サークルで論ぜられる機会がかなり存在したが、理事会が設置した委員会が「キリスト者条項」を本学が維持すべき根拠を全面的に検討し、それを報告書にまとめたのは今回が初めてである。このような報告書の作成は本学においてのみならず、日本のキリスト教諸大学においても最初の試みであろう。

2 報告書の構成と要旨

1) ICU 創立と「キリスト者条項」

日本のキリスト教諸大学は、キリスト者教員による大学形成をめざした当初の理想から大幅に後退した。本学の「キリスト者条項」は諸大学が実現できなかったヴィジョンへの挑戦であり、冒険である。

2) 教育者・研究者の役割と「キリスト者条項」

教養学部は、知育ともに人格性・人間性の育成を重視する。従って教員の教育者及び研究者としての姿勢が決定的に重要であり、「キリスト者条項」が意味を持つ。キリスト教精神は、本学における異文化間のコミュニケーション、学生相互の、また教師との出会い、教員の自発性と自己規律、キャンパス・コミュニティーの形成の必須条件である。

3) 学問共同体のアイデンティティーの表明としての「キリスト者条項」

キリスト教的価値観は神の前での人間的営みを徹底的に相対化するので、特定の価値の絶対化を退けるのであり、学問研究における批判的知の形成に寄与できる。キリスト者は批判的精神と人間愛を持って人間の現実を認識し、実践に向けて開かれた姿勢を保つ。またキリスト教的価値観の明確化はかえって他宗教や他文化との対話を活発にする。キリスト教的価値観への賛同を自発的に表明したものが本学の構成員であるから、キリスト教は多様な教員を結合できる原理であり、この学問共同体としてのアイデンティティーの表明としての「キリスト者条項」が意味を持つ。

4) 「キリスト者条項」維持の下での人事の原則

管理職の任命における「キリスト者条項」の適用は、建学の精神を確認する意味を持っているので、これを外すべきではない。ただし教授会の成員に一度迎え入れた教員を学問共同体から排除する原理として受けとめられることのないように、この制度の精神を周知させる努力をする必要がある。一般職員がキリスト者であることの意味も再考慮すべきである。

5) キリスト者教員候補の発掘及び育成

たとえば、若手の優秀なキリスト者学徒の発掘調査をする部署の常設が望ましい。また本学が優れた若手キリスト者教員を他キリスト教大学へ送り出す任務のあることも忘れてはならない。「キリスト者条項」は単なる制度の問題ではなく、本学の精神に対する構成員の自発的な態度決定の問題である。この認識に徹底すれば、キリスト者も非キリスト者も本学の構成員となる際に、本学の精神と運営についての理解と協力を誓約することができる。

付録資料

報告書の巻末には二つの資料を付録として置いた。「付録資料 I」は「キリスト者条項」の規定と例外措置の規定、及びこの規定の幾度かの改訂の過程を示すものである。「付録資料 II」は、委員会がマイケル・カワチ弁護士(本学評議員)に調査研究を依頼した結果の報告書(原文は英文で19頁に及ぶ)の要旨を示したものである。本学は建学以来、米国の大学の水準を維持することを目標としてきた。また本学は、人事、教学の諸制度について米国の大学に範を取ってきた。そのため最近の米国の教育機関における「キリスト者条項」適用の可否とその条件についての法律的判断は、本学においては無視することはできないものである。カワチ弁護士の報告書によれば、米国においても「宗教的教育団体」と認定され

る教育機関においては「キリスト者条項」の適用が認められる。これは逆に言えば、「キリスト者条項」を適用する以上は、キリスト教理念に基づく教育を実施すべき義務を伴うということである。

3 「キリスト者条項」の意味

- 1) 「キリスト者条項」は、異質な教員を目的において一致にもたらず大学の構成原理である。

キリスト教大学は、利害の一致や信条・イデオロギーの一致に基づく同質的な構成員の集団ではなく、大学の目的への賛同における一致を求める団体である。この目的への賛同とは、被造物神化を斥け、学問活動を含む一切の人間的な価値観と営みを相対化するキリスト教的判断様式と実践の承認を意味している。したがってそれは同時に、この目的に真摯に参与する非キリスト者教員をも平等な構成員とする根拠である。

- 2) 「キリスト者条項」は客観的な表現を求める。

キリスト教大学の目的への賛同は、大学の理念に対する単なる主観的了解にとどまらず、教育や大学運営などへのコミットメントを意味するので、教員は就任に当たり、また就任後も、キリスト者としての活動を通して、コミットメントの姿勢を証することが望まれる。教員の就任時の誓約も、キリスト者教員の行政職への任命も、「キリスト者条項」の客観的な表現として理解されなければならない。この点が曖昧にされると「キリスト者条項」は「差別」として意識される。

- 3) 「キリスト者条項」の保持は大学における批判的な知の形成を促す。

キリスト教大学は知のあり方において特殊な大学ではない。む

しるキリスト教大学は、大学たるにふさわしい批判的な知の形成に寄与するものであるべきである。これと反対にキリスト教条項の存在が大学において特権的な知を生み出すならば、批判的な知を探求する大学が自己矛盾に陥ることとなる。

- 4) 「キリスト者条項」の下での教員の行動原理は個々人の良心に基づく自己規律である。

教員はキリスト教大学の目的への賛同において、まず自己の主體的判断を迫られるが、就任後の教員としての諸行動においても、自立的な判断と実践が尊重され、またそれが要求される。その意味で「キリスト者条項」は教員に対し高度のモラルを期待する。

- 5) 「キリスト者条項」はキリスト教的価値とそれに基づく大学のアイデンティティーの選択を意味する。

キリスト教的価値は、イエス・キリストにおける愛や義によって示されているので、内容が明確である。この価値観がキリスト教大学を建設させる原動力となり、また大学のアイデンティティーを決定する。しかし大学という知的社会においては、キリスト教的価値観は批判的な知を形成する力として働き、また他文化や他宗教に対しては自己価値の絶対化を退ける。自己の価値観の保持と絶対化の排除という知的緊張こそはキリスト教大学にふさわしい知のあり方である。それは知的緊張を欠く安易な文化相対主義や宗教的多元論からキリスト教大学の価値観を区別する。キリスト教条項はこの立場を大学が選択することを意味する。

- 6) 「キリスト者条項」の保持のためにはキリスト者教員の高い構成比率の確保が必要である。

キリスト者教員だけが大学の目的に賛同し、それにコミットできると考えることは誤りであり、実際に非キリスト者教員

が優れたコミットメントを示す事例が多くある。しかしキリスト教大学の理想を実現する課題は、キリスト者教員が進んで負うべきである。またキリスト教的価値が大学内で見えるかたちで常に示されるためには、大多数の教員がキリスト者である必要がある。世俗主義による理想の侵食が進むと、実践の場におけるキリスト教理念の再建はきわめて困難になる。ことにキリスト教の力が弱い日本ではキリスト教的理念を再建する復元力が働かない。そのことをキリスト教大学関係者は十分に見通しておかなければならない。

- 7) 「キリスト者条項」の維持は、日本における少数者としてのキリスト者の位置の自覚を求める。

日本は米国のようにキリスト者がマジョリティーを占める社会ではないため、キリスト教理念の保持は自覚的に行われなければならない。したがって、キリスト教がマジョリティーである米国での宗教的差別の撤廃要求を、そのままに日本のキリスト教大学に持ち込むのは不適切である。教学に関して米国の一流大学に範を取ろうとする本学も、「キリスト者条項」に関しては、日本の大学であることを自覚して、独自の基準を維持する覚悟が求められる。

4 Q&A

Q1 この委員会は、どのような目的で設置されたのですか。

A1 本委員会は、「キリスト者条項」に関して学内や理事会・評議員会で表明された様々な意見を参照し、本学建学の理念に学問論的・大学論的な基礎付けをすることを目的として、理事会によって設置されました。委員の構成については、問題の性格上その任に相当と思われる数名が学内外から選任されました。

- Q2 この報告は「最終報告」と名付けられていますが、これは本報告が将来にわたって本学を拘束する最終的決定であるという意味ですか。
- A2 そうではありません。「最終報告」という言葉は、もっぱら「中間報告」に対応して、委員会の理事会に対する最終報告という意味で用いられています。
- Q3 従来「Cコード」と言い慣わされてきたものが本報告では「キリスト者条項」(Christian Clause)と呼ばれていますが、何か特別な理由がありますか。
- A3 「Cコード」という慣用表現は、本来構成員の主体的自律のための原理であるものが他律的束縛であるかのような連想を生み出しかねません。そこで、本報告では本学「寄附行為施行細則」第7条2項その他に基づき、条(article)項(clause)の規程という意味で「キリスト者条項」(Christian Clause)という記述的な表現を用いることにいたしました。
- Q4 「キリスト者」とはいったいどのように定義されるのでしょうか。また、「キリスト者条項」は、「キリスト者」であることのどのような側面に意義を見いだしていますか。
- A4 本報告は「キリスト者」についての実質的な定義を避け、新約聖書の記述の引用による形式的な規定だけを掲げています。さまざまな教会教派に分かれるこんにちのキリスト者の定義をすべて内容的に包括することは、不必要な議論を招くばかりで本報告の意図するところに必ずしも適合しません。ただし、聖書的な理解によれば、「キリスト者」であるためには単に「心に信じる」だけではなく、「口で告白する」ことが本質的に必要であるとされています。そこで、本報告では特定の信仰共同体において公の信仰告白をなしたことを

もって「キリスト者」であると認定しています(「前文」参照)。ただし、大学において求められるのは、教会におけるような信条の一致ではなく、学問と教育においてキリスト教信仰が果たす役割についての共通の認識とそれに基づく大学の共同の目的への賛同です。「キリスト者条項」はそのことの制度的な表現です。

- Q5 「キリスト者条項」の維持は、学問的営為と矛盾しませんか。
- A5 本報告では学問の本質を「批判的な知の形成」と見ており、教員がキリスト教信仰を有することの本質的な意義も、この批判的な知の形成を助ける点に認められています。キリスト者教員は、絶対者の前に立つことにより、真に批判的な学問的態度を養い、利己的な自己実現や科学万能主義を排し、研究者・教育者にありがちな知的高慢と権威主義に対する批判力を自ら身につけることが期待されています(第2節と3節を参照)。
- Q6 「キリスト者条項」の存在によって、本学が同質の考え方をもちた人ばかりの集まる排他的な集団となる危険はありませんか。
- A6 すでに前二問で触れましたように、「キリスト者条項」は、信仰内容によって個々の構成員を統一するものではなく、むしろキリスト教信仰を批判的な知と関わらせていますので、構成員が特定の世界観をもつことを要求しません。したがって、構成員の間に真にキリスト教的な原理が機能しているところでは、均一的な同族集団は生まれませんはずです。実際、開学以来本学の構成員の思想や信条はさまざまです(第3節参照)。
- Q7 「キリスト者条項」は、教員の学問的水準を維持する上で阻

害要因となりませんか。

A7 本報告は、「キリスト者条項」による教員採用を本学の自己限定の行為として捉えると同時に、それがいわゆる学閥などの人間関係による人事支配を防ぐという積極的な意義を果たしていることを指摘しています。ただ、学問的に優れたキリスト者教員の確保のためには、今までよりも計画的・長期的・組織的な努力が必要であることも事実です。本報告では、この点について若干の改善提案がなされています(第4節と5節を参照)。

Q8 「キリスト者条項」は、米国市民権法の禁止する宗教による差別ではありませんか。

A8 「付録II」をご覧ください。本委員会では、専門家の法律的検討により、「キリスト者条項」による雇用の日本国内および米国内での諸法令諸規定に抵触しないという結論を得ています。最近の米国での判例によれば、宗教的な性格を有する学校はむしろその自覚を内容的により鮮明にすることが求められています。

Q9 ICUは伝道を目的とした大学なのですか。

A9 伝道は教育研究機関としての大学の目的ではありません。それは教会の役割です。けれども、全人教育を目指す本学では、学生がキリスト教に触れ、その挑戦を受ける機会をつくることは、学問と教育に不可欠な責任の一部と考えられています。これは、建学以来の本学の基本的理解です。「ICUは、決して回心を迫るような狭量な大学ではありません。キリスト教を人生観に掲げ、キリスト教により価値判断を下すという意味において、基督教大学なのです。あなた方はキリスト者になるように求められることはありません。けれども、私たちは、あなた方に——あなた方一人一人に——キリスト

者としての生き方で挑戦してゆくつもりです。」(湯浅八郎—『国際基督教大学創立史』341頁より)。

Q 10 国際化時代になぜキリスト教にのみこだわるのですか。

A 10 現代世界において宗教間対話の主要な担い手となっているのがキリスト教であるように、真摯な学問的対話や宗教的対話は、それぞれが自らのアイデンティティを明確にした上ではじめて有意義なものとなります。それゆえに、「キリスト者条項」を維持することは、真の国際化および宗教間の対話に貢献するための基盤を提供することになります(第3節参照)。

Q 11 ICUがキリスト教精神を維持するために「キリスト者条項」を堅持する場合、従来の例外措置は今後どうなるのですか。

A 11 本報告の「結び」に記されているように、これまで例外措置として採用された非キリスト者教員の貢献には極めて大なるものがありましたが、この措置は今後とも本学の教育研究の水準を維持するためには必要と思われる。

Q 12 「キリスト者条項」は本学のキリスト教精神を具体化するための唯一の手段であると考えられているのですか。

A 12 本報告は、「キリスト者条項」が本学建学の基礎をなすキリスト教精神を具現するために最低限必要不可欠であると考えています。

Q 13 「キリスト者条項」の具体的な適用に関する諸問題をどのように考えていますか。

A 13 本委員会は、その名称にも表現されている通り、「理念」を検討するための委員会です。「キリスト者条項」がその具体

的な適用に際して種々の困難を生んでいることは、本報告にも指摘されています(第4節参照)が、これらの諸問題は同条項の精神を徹底し、それに則った実践をなすことによって解決されるべきものであって、同条項の廃止によって解決されるとは考えられていません。

註 「ICUのキリスト教理念検討委員会最終報告」をめぐるフォーラム(1994年10月18日開催)に際し、委員会は本学の教職員のために「Q&A」を作成、配布した。ここに「解説」の参考資料として収録した「Q&A」は、フォーラムでの質疑を顧みて若干補筆を行ったものである。

On the occasion of the publication of The Christian Ideals of ICU

December 14, 1994

This booklet is a compilation of the “Final Report of the Committee for the Study of ICU’s Christian Ideals” which was approved at the May 25, 1994, meeting of the ICU Board of Trustees with an explication of the same.

In selecting the committee members, the Board of Trustees incorporated the counsel of President Kunio Oguchi, and commissioned those representatives of both the Board of Trustees and the University who have: 1) administrative experience within the university, 2) leadership roles in Christian circles, 3) academic expertise in Christian scholarship, and 4) a broad knowledge with regard to the expectations held in the international arena as well as in society in general. The five persons appointed were: Trustees Hideyasu Nakagawa and Tetsuo Chino, Councillor Kikuo Matsunaga, and Professors Yasuo Furuya and Koichi Namiki. All five were the ideal persons to undertake an academic investigation into the Christian ideals of ICU from a broad perspective. Under the direction of the Committee Chair Hideyasu Nakagawa and with the assistance of University Minister Anri Morimoto as secre-

tary, the committee worked energetically and produced an Interim Report on February 21, 1994; the Final Report was submitted on May 25, and the Explication on December 14 of the same year. These were accepted and duly approved by the Board of Trustees.

As Chairman of the Board of Trustees, I wish to express my sincere gratitude that the interim and final reports each in their turn became the focus of fervent debate at both the Board of Councillors and Board of Trustees meetings, and that constructive criticisms were energetically presented. I believe that such extensive earnest debate may have been a rare event in the history of the Board of Councillors and the Board of Trustees. I understand that heated discussion took place also at the forum for faculty and staff members held in the Fall to discuss the report. This surely is further evidence that the report is of great interest to those concerned with the university today.

The report, via the members of the Board of Councillors, has already become a matter of great interest to some outside persons connected with ICU, and opinions have been conveyed to ICU expressing the hope that it may be made public. In view of this, the Board of Trustees has decided to publish the report and its explication, bound together with English translation, to a wider circle of readers at this time. We would be delighted if this report can be the least bit helpful as material for discussion for anyone connected to other Christian universities in Japan which hold fundamental educational goals similar to those at ICU.

Shoichi Saba, Chairman, Board of Trustees
International Christian University

Committee for the Study of ICU's Christian Ideals

Period of Commission
July 1993-December 1994

"Final Report"
Approved by the Board of Trustees
May 25, 1994 (B.T. 94-13)

"Explication"
Approved by the Executive Meeting of the Board of Trustees
December 14, 1994 (E.F. 94-81)



Committee for the Study of ICU's Christian Ideals: Final Report

(translation)

Background

International Christian University in Article 3 of the "International Christian University Articles of Association" mandated carrying out education based in the Christian faith; in order to realize this goal, the so-called "Christian Clause," which establishes the principle that full-time faculty shall be Christian, has been clearly specified in Article 7 of the "Bylaws Governing the ICU Articles of Association." However, accompanying the expansion of the scope of education at ICU, a tendency toward flexible administration of the Christian Clause has become strong, and critical opinions opposing preservation of the Clause have come to be expressed by faculty at public functions. In 1992, there arose the necessity to closely re-examine the faculty personnel rules, and the Board of Trustees resolved to retain the Christian Clause in consideration of the spirit of the establishment of ICU (resolution of the January 25, 1993, extraordinary meeting of the Board of Trustees, and agreement of the Board of Councilors on February 22 of

the same year). At the same time, the Board of Trustees resolved to set up a special subcommittee and conduct a re-examination of the Christian Clause (B.T. 92-30, No. 2). The Executive Board of Trustees on March 17, 1993, appointed the five above-named committee members, selected from among the trustees, the councilors, and the faculty. On July 19, 1993, President Kunio Oguchi convened the first meeting, at which Hideyasu Nakagawa was selected to be chairperson and the name, "Committee for the Study of ICU's Christian Ideals" (*ICU no kirisutokyo rinen kento iinkai*), was decided upon. Subsequently, meetings were held on August 31, November 19, and December 6, 1993, and on January 31, February 12, March 11, March 29, April 16, and April 30 of this year, during which there was much intense deliberation on the reasons behind the establishment of the Christian Clause, the circumstances of the founding period, and the administrative problems occurring at ICU since then, as well as on the grounds for the preservation of this clause from the standpoint of the university as an academic institution. Tentative conclusions were presented in the form of an interim report to the Board of Councilors and the Board of Trustees on February 21 of this year. We present here the final report, having taken into consideration the opinions of the Councilors and Trustees, as well as of the members of the University Religious Affairs Committee.

Preface

A "Christian" as premised in ICU's "Articles of Association" refers to a person who accepts the faith attested to in the New

Testament. If we may select one from among the many representative attestations found in the Bible, the following may be apt: "if you confess with your lips that Jesus is Lord and believe in your heart that God raised him from the dead, you will be saved. For one believes with the heart and so is justified, and one confesses with the mouth and so is saved." (Romans 10: 9-10, New Revised Standard Version)

The Christian Clause under discussion in this report is the principle which provides the structure of the university organization. It is an aspect that is distinguished, though inseparable, from that of individual personal belief. In deliberating on this Clause, it is necessary to avoid confusing these two aspects.

The Christian Clause can serve as the constitutive principle of an organization because, as is expressed in the biblical passage quoted above, Christian faith does not merely begin and end with individual personal conviction, but is necessarily brought into a public arena through profession. Christians are able to create an organizational entity based in this communality of belief, which gives cultural expression to shared goals. The construction of International Christian University is one example of such cultural creation. ICU's Christian Clause is deeply rooted in the tradition of this formative force as found in the Christian religion.

1. The Founding of ICU and the Christian Clause

Establishing an academically first-rate Christian University in Japan was a dream which Christians involved in higher education in both North America and Japan had embraced since early in

the twentieth century. The Second World War brought to a halt any progress toward realization of that dream. However, the profound regret which both Japan and the U.S. felt about the tragic war, together with their sense of responsibility toward the next generation, gave rise to a rebirth of the dream of building a new Christian university in Japan. After the announcement of the plans for this Christian university, a founding movement among Christians in the U.S., Canada and Japan sprang to life, and those who would come to bear the weight of founding this university joined forces. In the midst of the post-war state of affairs, the founders took a critical stance toward the educational ideals of Meiji Japan — Japanese soul *cum* Western technology, the aim of which was national wealth and military strength — and determined that the task of this university would be to nurture and send forth into the world people who would carry out leadership roles for the building of a new world.

Fortunately, the plans for construction of this new university garnered the enthusiastic support of many people here and abroad, non-Christians included; fundraising activities and concrete formalization of the plans progressed, and in 1953, eight years after W.W. II ended, the university was opened as a liberal arts college with graduate school level studies also within view. The above-mentioned task entrusted to the university was expressed as its founding aims, “to establish a free and devout academic atmosphere based in the spirit of Christianity, and to nurture internationally-minded people of conscience possessing good common sense as members of a democratic society” (Proposals for the Establishment of ICU). These aims were given concrete expression as

“internationalism,” “the Christian spirit” and “high academic standards,” rendered in the name “International Christian University.”

In order to meet these tasks, the founders affirmed that a teacher should possess an international point of view, be endowed with high scholarly abilities, and possess self-identity as a Christian. This last rule is what was hammered out into the Christian Clause. During and since the Meiji period, private universities in Japan, and Christian universities in particular, had been at a disadvantage under the educational policies that favored state universities. During the period following W.W.II, many existing Christian universities were still at pains to meet the minimum requirements as universities. In such an environment, assembling a faculty of Christians with the highest academic standards was no less a daring adventure then as it is today. Of course, this vision was one which the founders of the Christian universities since Meiji all equally yearned for; it was not original with ICU. However, the lofty ideals of those universities at the time of their inception were forced into compromise, and retreat followed upon retreat, down to the present day. Preserving the Christian Clause is, today more than ever, a manifestation of the resolve that this university will succeed to the vision which Japan’s Christian universities have not been able to attain.

This ideal has brought together Christian teachers of exceptional scholarship and character from abroad; within Japan also, Christian teachers came to participate in the founding of ICU without waiting for their retirement from national universities. There were many who came from abroad and made sacrifices for the sake of ICU and the future of Japan. Among them was the world-

renowned theologian Emil Brunner, who left the University of Zurich and interrupted his life's work of writing on theology. With the great contributions of these pioneers, the ICU adventure was accomplished. It should particularly be mentioned that efforts have been made since the founding days to nurture the young Christian teachers who would shoulder the education and scholarship of the next generation. Even with achievements accomplished to date, these efforts are an important element which ICU ought to consciously recognize.

2. The Role of Educator/Scholar and the Christian Clause

That ICU's faculty are Christian is profoundly related to its educational practices. When it was founded, ICU chose the path of liberal arts education. The college of liberal arts does not aim only for the acquisition of a wide range of knowledge, nor does it make its goal merely to foster internationally-minded persons skilled in languages. What ICU's education aims for, first and foremost, is that every student may acknowledge their inherent tendency to pursue self-interest, acquire the critical reasoning capable of setting limitations on the self, and develop a humane character and responsible personality which endeavors to build a free world. Without establishing a relationship with God and fellow human beings, developments in science and technology can only lead to submission to the pursuit of self-interest. ICU has thus far aimed to create an international educational environment, but has clearly recognized all along that in order to have true and meaningful

communication between people of diverse cultures and languages, one cannot dispense with human truth, love, trust, and humility. Thus, ICU's liberal arts education calls for a spirit of acceptance of one's fellow human beings, along with a self-critical understanding of the reality of human nature. The very basis of this spirit consists of God's justice and love as manifested in Jesus Christ.

Since its founding, ICU has striven to see that this attitude is reflected in its curriculum and religious activities. ICU has also expected that these educational objectives would be achieved in the personal teacher-student or student-student encounters, in all aspects of education, research and daily life. The idea of faculty living on campus and all students in dormitories was based on this expectation. Education at ICU was by no means to be limited to the classrooms and chapel. Rather, ICU intended that, just as it would be academic and international, the Christian ethos would permeate the entire community. Through the participation of both faculty and students in that community, ICU's educational ideals will be realized. Had ICU been simply a research institute, the formation of a campus community such as exists today would not have been necessary. It would have sufficed to form a group of scholars engaged in a high level of scholarship; the personal character of faculty members would not have mattered so much. Furthermore, had ICU been a place merely for international fellowship, it would perhaps have sought a faculty composition possessing diversity in religious beliefs as well. However, to put into practice the above-mentioned ideals, it is essential that the faculty hold in common a Christian understanding of human nature and a positive view of the Christian faith. It is for this reason that ICU adheres to the

Christian Clause.

In addition, what must not be overlooked with respect to the Christian Clause is the self-discipline of faculty members as scholars. Because academia is a place for intellectual inquiry, its constituent members are susceptible to measuring each other on exclusively academic terms, which leads to intellectual pride, an unjustifiable sense of superiority over others, and self-righteous attitudes. The university has been witness to examples of distrust toward colleagues, offensive speech and behavior, and unsociable attitudes among its faculty. For this reason, it will not be possible to construct a truly interdisciplinary and international academic community, unless each scholar is willing to engage in an ongoing process of intellectual self-examination. In essence, an academic community based on self-discipline should be the intention at any university, but it has been the uniform experience from Japan's past history that human intellectual arrogance obstructs the accomplishment of that intent. It is therefore essential that each faculty member realize his or her own limitations in the presence of a transcendental being. ICU's Christian Clause is the fundamental key to self-discipline. It also serves as the basis for making each faculty member free of various powers inherent in the academic community. ICU must not lose this basis for its existence as a university.

University faculty are accorded independence and freedom of conduct in their student guidance as well as in their intellectual activities. This freedom, underpinned by corresponding responsibility, is the real basis of faculty self-government. The self-discipline looked for in the faculty must therefore be all the more strict,

surpassing the standards of other professional ethics. As a result, each member of ICU's faculty should be able to acquire a high level of personal autonomy: he or she should conduct himself or herself on the basis of conscience, not only as a scholar, but as a Christian, be humble about his or her mistakes, and value mutual trust. The Christian Clause at ICU has up until now functioned as the basis for the faculty's self-discipline.

3. The Christian Clause as the declaration of the identity of the academic community

Western universities experienced a long history of dissension between reason and faith before the concept of "academic freedom" became established. Through this dissension, however, Christianity learned to restrict the role of religious faith in the academic arena to the personal aspects of the intellectual activities of the individual person. As a result, religious faith came to play one positive role in scholarship: that of relativizing the subject of the intellect in the presence of God. The Christian religion discourages humans from becoming masters of the world by means of their intellectual prowess, as well as from submitting themselves to any specific values in intellectual pursuits. It is in this aspect that the Christian faith can contribute to the formation of a critical intellect: it prevents the scholar from making an object of study absolute or from deifying a particular aspect of the world.

To pursue learning without enshrining any specific values as absolute is to view the reality of human nature and society as objectively as possible. It is, on the one hand, to squarely face the

tragic reality of human existence and, on the other hand, to look at this reality with hope for the redemption of human nature. To put it briefly, it is to perceive humanity in its two aspects, its wretchedness and its greatness, and to pursue scholarship with a critical outlook and humanitarian love. Hence, the Christian attitude toward learning is congenial to the realization of a university community.

Generally speaking, to maintain a Christian commitment to the pursuit of intellectual inquiry is to expose oneself to a paradox of values. It means both rejecting nihilistic relativism and not falling into self-absolutization at the same time. If, by doing this, one hones one's critical sense with regard to the ideologization of the values brought into academia itself, the paradoxical nature inherent in Christians' involvement in scholarship will bring intellectual tension to learning and research, define their identity as Christians, and stimulate intellectual exchanges on world views among scholars. The individual's scholarly conscience will thus be sharpened. Twentieth-century universities all experienced a decline of intellectual dialogue to the detriment of their original mandates when they were embroiled in Establishment vs. anti-Establishment issues. The maintenance of an institutional identity in a manner that can encourage an creative intellectual tension to its members will be of extreme importance for the vitality of intellectual activities in the future.

The maintenance of self-identity is indispensable to intellectual dialogue with others, not only in university settings but also between religions and cultures. In recent years, the plurality of cultures and traditions has been emphasized, and mutual respect

and peaceful co-existence are being advocated. Dialogue between different cultures and religions broadens the vision of people living in their individual religions and cultures, and deepens their understanding of the characteristics of their own religion and culture. Nevertheless, dialogue will not be effective if the participants' own positions are not clear. Awareness of one's own existence in the spiritual dimension, i.e., maintenance of one's own religious and cultural identity, constitutes the beginning of fruitful dialogue. One cannot adopt an open attitude, respect other cultures and religions and learn from them, when one's self-identity is ill-defined and unclear. In order for ICU to be an open-minded university, it is necessary that ICU be conscious of the distinctive characteristics and the cultural heritage of Christianity as the source of its identity. At the same time it always has to direct criticism inward, rejecting absolutization of the self that often accompanies the distinction of the self and others. Self-criticism is an intellectual activity which probes the meaning of one's own identity: it does not aim for the dissolution of identity.

While each individual maintains his or her own sense of personal identity, it is necessary to give this identity a corporate expression in order to establish a shared communal identity, i.e., an institutional self-identity. In this sense, the Christian Clause is the basis for the identity of ICU as an academic community. The Christian Clause is certainly a kind of institutional apparatus, but it is not an impersonal system as opposed to one's personal religious faith; it is in essence a vow of commitment which regulates the autonomy of its constitutive members. Faculty members who take up positions at ICU are all regarded as voluntarily agreeing

with ICU's fundamental ideals as expressed in the Christian Clause. Non-Christian faculty members appointed under exceptional measures (Article 7, Clause 3 of the "Bylaws Governing the ICU Articles of Association") also must state clearly at the time of their formal employment contract that they thoroughly understand the goals and ideals espoused by ICU and declare their voluntary resolution to share in assuming the task entailed. In this sense, the Christian Clause is the principle which unifies under a common ideal all those who wish to take up a position at ICU; its objective is not to exclude.

Generally, when members of a group are homogenous, there is no need to accomplish group formation via a vow; it is human relations that will hold the members together. For an intellectual community that takes shape according to the autonomous and critical endeavor of individual scholars, homogenization of its members should not be expected, nor is it desirable. In fact, the composition of our university members has been richly diverse since the founding days. To begin with, the establishment of ICU was the result of cooperation among international and ecumenical Christians, transcending denominational divisions. From the time of its founding until the present day, ICU has been a community composed of Christians of various denominations and viewpoints.

When one considers the actual state of divisions among the various Christian churches and denominations which fall so easily into futile dogmatic self-assertion, ICU's ecumenical openness should be evaluated as a guarantee of the diversity of its constituents. It serves as a stimulus for unending inquiry into the essence of Christianity, and as such is suited to the intellectual activities of

a university. The Christian Clause is thus intended to promote the pursuit of a common goal that bridges the diversities of its members.

4 Principles of personnel management under the Christian Clause

These days, secularization in intellectually advanced countries is making remarkable progress, and the Christian ethos is facing crisis. As ICU is located in a country with a non-Christian tradition, it is difficult even today to be assured of obtaining excellent Christian faculty members. In addition, in some countries it is not advisable to advertise a position with Christian faith as one of the conditions. While the Christian Clause might be in danger of being considered a form of discrimination in countries where Christians constitute a large majority of the population, in a society such as Japan's, where Christians are extremely few and are discriminated against, the Christian Clause holds symbolic significance, denoting tolerance and freedom of religion and thought. Of course, scholars raised in countries with a long tradition of Christian culture can identify themselves as being Christian even though they may not have personal Christian commitment. In contrast, those from countries with a non-Christian tradition who nonetheless have a very strong sense of Christian identity often do not possess intellectual objectivity. There are also scholars of high principles and conscience who abstain from baptism as a form of religious expression. Personal identity as a Christian is often subjective. There are numerous problem areas such as these. If we are to maintain

the Christian Clause in spite of such problems, it is essential that we establish policies to deal with the realities, while fully cognizant of the difficulties involved. We should not adopt policies which readily follow the path toward secularization.

Since the war, many Christian universities have abolished any kind of Christian requirement with respect to faculty, university administrators, trustee members, etc., and they are now beset with regrets that this has brought about a weakening of the educational ideals they had held at their inception. Training their successors is now considered to be urgent business at each university. In view of such a state of affairs, we have to say that now is indeed the opportune time for reaffirmation of the Christian Clause at our university.

It is stated in Article 7, Clause 3, of the "Bylaws Governing the ICU Articles of Association" that the Christian Clause is applicable to ICU's administrative personnel, but it is said that Divisional Chairs (CLA and Graduate School), who are not administrative personnel according to university regulations, are also subject to the same treatment. While Divisional and Graduate School Chairs are the faculty representatives of the group they belong to, they are also important administrative positions in the university, and it is in this sense that application of the Christian Clause to Divisional Chairs is to be justified. Appointments to administrative positions are an expression of the policy of an organizational body. In the case of ICU, every administrative appointment carries significance as a reconfirmation of the founding ideals. If, however, we are of the understanding that all of the members of ICU support the ideals of the university, applying the Christian Clause to administra-

tive appointments may produce tension among Christians and non-Christians alike. The Christian faculty should be aware of this tension and subject themselves to a thoroughgoing self-reflection. Being a Christian is by no means a "license" to take up a specific position. On the contrary, it should be an expression of preparedness for self-sacrifice. Without such reflection, the ideals of our university become powerless.

The ICU education is supported also by a large number of full-time instructors, e.g. in the language courses, who are not members of the faculty meeting. Although the Christian Clause is not applied in the hiring of these instructors, their educational role and the influence they exercise on students are enormous. Employment of these full-time instructors should therefore be carried out with full consideration of the significance of the Christian Clause, with every effort made to obtain their understanding of ICU's ideals at the time of employment.

It is not only the faculty who must understand ICU's mission and bear the burden. When ICU was founded, the Christian Clause applied to all employees. Actually, there were many Christian staff members who gathered here because they supported our founding ideals. They influenced students considerably not only in their workplaces, but through contacts in their daily lives. The general staff continue to be in a position to come into contact with students, which makes it desirable for them also to be Christian. A better understanding of ICU's founding principles should be promoted among the general staff, and personnel policies should be developed with reference to positions of responsibility which involve direct contact with students.

5. Searching for and nurturing Christian candidates

In today's increasingly secularized and pluralistic society, we often hear the argument that it is not possible to turn the Christian Clause into realistic principles of personnel management. However, that is a judgment to be made only after first having attempted long-range, organized efforts to obtain capable persons, both within and outside of Japan. As it stands now here as at other universities in general, personnel matters are conducted on the basis of information obtained by faculty already employed at ICU. Under the present circumstances, there are few opportunities made available for first-rate Christian scholars to freely apply. Accordingly, the Christian Clause must be applied not only by open recruitment by responsible recommending parties, but also by directing attention toward young Christian scholars and taking positive measures, such as setting up a permanent section for keeping track of possible candidates for employment.

As mentioned in the opening statements, ICU was established with the expectation of both Japan and the international community that it would educate students with promising future prospects who would be capable of demonstrating responsible leadership in the new times and the new world. Living up to that expectation, ICU has shown results, particularly with regard to training the people who contributed to post-war education. Among them are a considerable number of ICU graduates who have been active in bearing the brunt of the education taking place in Japan's Christian schools. ICU should not only endeavor to invite superior

Christian faculty members; it should also strengthen its role in training young, superior, Christian faculty members and sending them out to other educational institutions. It is important for ICU to train and supply talented university level people within Japan and abroad, especially in Asian countries. This would satisfy many demands outside of ICU, and eventually provide a steady supply of heirs to ICU's education. Private universities will be unable to maintain their traditions unless they purposely prepare and train people in all areas — trustees, faculty and clerical staff, to succeed to the spirit of their founding ideals. In this respect, ICU ought to realize its responsibility as a pioneering educational institution.

Conclusion

The "Report of the Committee for the Study and Inquiry into the Basic Problems of International Christian University" (May, 1993, Professor Kinukawa Masakichi, Chairperson) made clear the results of their investigation, to the effect that ICU' is in the midst of a serious identity crisis. This committee has confirmed through a re-examination of the Christian Clause that it is the expression of ICU's mission, and is deeply related to the identity of the members of this university. It is our fervent wish that upholding the Christian Clause will contribute toward reaffirmation of the identity of the members of ICU. As stated before, the founders of ICU were in agreement in their discernment that without the establishment of a fellowship with God and one's fellow human beings, developments in science and technology are no more than submission to man's

pursuit of self-interest. It has become increasingly important to reaffirm their recognition in these days at the close of the twentieth century.

The human race in the twentieth century has reached the point of being dominated by "specialists lacking spirituality," and has fallen into the unreflective philosophy of "science is almighty." However, this philosophy, by giving unrestrained affirmation to human knowledge, has brought about suppression of humanity and destruction of culture, and has forced our awareness of the crisis which is driving the human race to the brink of destruction. The ideals of International Christian University invite profound reflection and perception with respect to this crisis. In other words, these ideals demand that the faculty, staff and students of ICU respond to new tasks such as these arising in these modern times.

In order to pursue these ideals, ICU has proceeded with its educational program by placing emphasis on its four-year undergraduate school with a liberal arts ideal. This has been a path of self-limitation (*Askese*), carefully thought out for the purpose of executing ICU's ideals and yielding educational results. It was decided that the scale of the university would be kept to a fixed number of students with the matching number of faculty, and the research and educational scope would be limited to undergraduate education and graduate school education directly linked to undergraduate programs. The intent was not to cover all ranges of specialization in many diverse fields as is the aim at other universities. On the contrary, ICU was to be a new experiment at carrying out high quality teaching and research within a limited size and scope.

Whilst proceeding under such self-limitations, ICU has in fact in the fields that were established provided first-class educators and researchers, and the undergraduate school has come to take the lead in the currents of the educational world by virtue of the mutual cooperation and coordination of diverse research fields, which is the proper aim of liberal arts education. ICU is already held in high repute for producing and sending out into wide areas of society highly capable persons such as had not been seen before.

In concluding this report, we wish to reiterate our understanding that ICU's Christian Clause is not simply a matter of institutional regulation, but rather is a matter of the voluntary determination of the members of the university community toward the spiritual ideals of the university. The Christian commitment should consist of the vow taken by university members upon their employment, and later function in the form of self-discipline. For that very reason, understanding and support for the Christian Clause can be shared among the non-Christians hired under exceptional measures. In fact, we recollect with gratitude the considerable contributions made toward ICU's mission by numerous superior non-Christian faculty members. If this Clause makes it possible for the members of ICU, regardless of whether they are Christian or not, to contribute to the common good of the academic community as a whole, then it can be said to be the most important constitutive principle.

The Christian Clause will continue to call upon all members of ICU community to reaffirm their commitment. We must each individually continue to voluntarily question the meaning of our being a Christian at this university. Neglecting to do so will result

in failure to cultivate the spirit of self-discipline called for at ICU. What is indispensable for the spirit of self-discipline is not only honesty of the individual toward his or her self, but shared trust and objective evaluation. These will in turn foster a sense of responsibility toward the community; members of the ICU community will have to deal strictly with themselves and with others. For example, should a member of the university, after taking up a position, become convinced he or she can no longer agree with and support ICU's fundamental educational principles, it is expected that he or she would have the integrity to withdraw from the university of his or her own accord. The Christian Clause has been the constitutive principle of this university since its founding days, and it will continue to sustain this unique experiment in Christian higher education in Japan.

Postscript

The task of this committee was to establish the significance of the Christian Clause which the university founders established and which the university has preserved to this day, reviewing its history and current state of affairs, and at the same time identify our tasks for the future.

In closing this report, several points need to be reconfirmed. First, it is expected that in a university community which adheres to a "Christian Clause," the faculty, staff, students, and the trustees as well, will be ever humble before God revealed in Jesus Christ. Furthermore, there will be constant and sincere reflection on all aspects of university activities in accordance with the ideals es-

poused in the Articles of Association. Each individual will renew his or her commitment to the university.

Secondly, the Christian Clause has become an object of contention and has given rise to tensions, and this situation can be expected to arise again in the future. It is therefore always important to proceed with reflection on the problem in a fundamental way and return to the founding spirit of the university. Also, the environment surrounding ICU, amidst the vicissitudes of history, has become grim; just as many Christian universities have experienced and ICU too has come to foretaste, there will be a time when the identity of education based in Christianity will be profoundly called into question. However, it is certain that the Christian ethos and the campus life produced by the commitment of the members of the community will recur, becoming the fountainhead that will help us to overcome such crises and clear the way for new paths.

Thirdly, International Christian University possesses its ultimate *raison d'être* in the promise of Jesus Christ that "where two or three are gathered together in my name, I am there among them" (Matthew 18:20). In fact, ICU's founders placed their hope in this promise and set off on the adventure of establishing a new university. Their successors, too, have inherited this hope, and can work with the honor and joy of contributing to the endeavor of the university. We shall not cease praying that the Christian Clause may always serve to this hope.

Translation by Anri Morimoto

APPENDIX

I: ICU Official Documents

A. THE BY-LAWS TO THE ACT OF ENDOWMENT

(February 23, 1987)

Article 7. The employment of all staff personnel shall follow the Regulations of Employment.

2. All permanent full-time, regularly employed faculty members from the rank of Instructor and above shall be Christian. If necessary, exceptions may be made to this principle by action of the Board.
3. Where an exception is to be made under Clause 2 above, the appointment of the academic staff member shall be made on the condition that he/she shall not be eligible to hold any administrative positions, including a division chairmanship.
 - (1) Exceptions for an academic staff member from the rank of Assistant Professor and above shall be based on evidence that the candidate is a person of high repute both as scholar and a teacher, who understands and positively supports the Christian spirit and the educational objectives of the University:

- (2) Exceptions for an academic staff member at the instructor level shall be conditional upon the candidate having had teaching experience as a full-time academic staff member at ICU and on evidence that he/she understands and positively supports the Christian spirit and the educational objectives of the University.

B. REGULATIONS RE APPOINTMENTS OF ACADEMIC STAFF MEMBERS OF THE INTERNATIONAL CHRISTIAN UNIVERSITY
(February 23, 1987)

Article 3. The academic staff shall be appointed from among Christian believers who have a deep understanding of the purposes and programs of ICU, who have a positive conviction concerning the realization of these purpose and programs and who meet the qualifications stated below. However, excepted from this provision are Assistants and academic staff at the rank of Instructors and above whose exemption have the approval of the Board of Trustees prior to appointment.

C. BY-LAWS FOR EXCEPTIONS OF THE REGULATIONS RE APPOINTMENTS OF FULL-TIME ACADEMIC STAFF MEMBERS OF ICU
(October 19, 1987)

Article 1. Those full-time instructors who are hired with a definite term of service will be hereafter called instructors (contractually-

appointed) or instructors (CA). Instructors (CA) and assistants will be appointed only by utilizing openings among the regularly appointed full-time instructors.

- 2) Appointments of instructors (CA) or assistants using an open position shall be made on the approval of the Senate following a proposal by a Division Chairman to the Chairmen's Meeting after approval by the VPAA and the CLA Dean.
- 3) The Christian code does not apply to an instructor (CA) or assistant in this category.

II: The "Christian Code" Under U. S. Law (Extract)

December 20, 1993

Ladies and Gentlemen:

You have asked this Firm to provide its advice to the Board of Trustees of International Christian University (hereafter "ICU" or the "University") concerning the legality under United States laws of certain provisions of ICU's charter documents which restrict the hiring of senior administrators and full-time faculty members to Christian believers. These provisions are informally referred to as the "Christian Code" or simply the "C-Code" (hereafter the "Christian Code") and are set forth in Article 9-2 of the University's Contribution Act, its charter document (hereafter the "Charter").

The University recently completed an extended effort to determine areas of current operations which require long- and short-term attention. The results of this effort are set forth in the "Final Report of the University Self-Study Committee", published in May, 1993. One theme of the Report is the need to reaffirm the University's commitment to its original purposes, an important part of which is the Christian foundation of the University embodied in, in part, such things as the Christian Code.

At the same time, some members of the University community have voiced concern about whether the Christian Code is inconsistent with the character of the University as an international institution of higher learning. Among the statements representing

this view is one which asserts that “The Civil Rights legislation of 1964 and its Title 7 made it illegal to discriminate on the basis of race, creed, age, sex, ethnicity and national origin.... In North America it is illegal for the employer to ask for information about the prospective job seeker’s race, creed, sex, age, marital status, etc. ICU with its C-Code cannot legally engage in recruitment activity in North America.”

The Trustees desire to give full consideration to the issues raised by statements such as the foregoing. We have, therefore, been asked to review the issues raised by that statement and present our views to you in this letter. With your consent, this letter addresses only the laws of the United States and no other jurisdiction.

Summary of Conclusions

Based on our review of the facts provided by the University and our review of applicable United States federal statutes and court decisions, we are pleased to advise you of the following:

First, ICU is expressly exempt from the requirements of Title VII. As a foreign employer, Title VII has no legal force on ICU’s operations in Japan. Accordingly, ICU is not prohibited from requiring its full-time faculty to be Christian believers and may so advertise within the United States.

Second, with respect to a possible ICU office in the United States, considered on a stand-alone basis such an office would not be an

“employer” under Title VII. Title VII applies only to employers with at least 15 employees. However, under the common law theory of “Joint employer”, ICU’s Japan and U. S. operations might be considered as a single employer and, if so, the number of employees in Japan and the U. S. combined for the purposes of Title VII. There is some basis for believing that the joint employer theory would be applied in this manner to impose Title VII obligations on a local U.S. office like the office contemplated by the University. In any event, such obligations could not be applied to the University itself.

Third, though ICU is not governed by Title VII, you have asked us to assume (merely for purposes of discussion) that ICU were governed by Title VII. In that case the legality of the Christian Code would depend on a determination of whether ICU is a “religious educational institution” under Title VII. If so, the University would be exempt from the requirements of Title VII as to discrimination on the basis of religion. ICU would be permitted to discriminate on the basis of religion in any of its activities, both religious and non-religious.

Few courts have expressly dealt with the issue of what constitutes a “religious educational institution”, leaving little guidance for responding to this extremely hypothetical issue. One recent decision in the Ninth Circuit, which we refer to below as the *Kamehameha* case, could be interpreted to mean that rules similar to the Christian Code violate Title VII where the school is not “essentially religious” in character. That decision has been heavily criti-

cized, but does point out that the standard for determining whether a university is a "religious educational institution" will require a relatively high religious content in the establishment, purpose and operations of the institution.

In any event, neither Title VII nor the *Kamehameha* decision have any legally binding force on ICU.

Very truly yours,

(signed)

Michael T. Kawachi

MAYER, BROWN & PLATT

Committee for the Study of ICU's Christian Ideals: Final Report

EXPLICATION

(translation)

1 Crisis at Christian universities and the Christian Clause

The circumstances at ICU which lead the Committee for the Study of ICU's Christian Ideals (hereinafter abbreviated as "the Committee") to prepare the Final Report (hereinafter, "Report.") is as detailed in the Background of the Report. The regulation that full-time faculty members of ICU be Christian (This is termed the "Christian Clause" in the Report) has evoked a situation of the greatest split in opinion among the members of ICU. This fact is one manifestation of the crisis in the ideal of a Christian university occurring at our university, but the situation at many other Christian universities in Japan is even more serious. At large Christian universities, the number of Christian faculty members has fallen to ten percent or less of the total; in the worst case, there are departments without even a single Christian. There are more than a few

universities, too, which have not appointed a Christian to the very essential post of university president. Furthermore, we hear that there are even university departments in which it is necessary to hide the fact that a candidate for a faculty position is Christian. The internal crisis in Christian universities is worsening progressively.

Lying behind the striking retreat from the ideal of a Christian university or from a "Christian clause" which is occurring at all Christian universities is the administrative problem of the pointless expansion of the scope of the university. As a result, it has become difficult to take a large number of qualified Christians and form a faculty body. Enthusiasm for preserving Christian ideals regressed, with no reflection given to such a situation, which is a still more fundamental crisis. The infiltration of modern secularism, based on cultural relativism and criticism against discrimination, also contributes to worsening the situation. This spirit of the times brings the very reasons for the existence of a Christian Clause into question. Furthermore, opportunistic application of the Christian Clause led to abuses of it within the university, evoking criticism from sincere members of the university.

ICU is exceptional among the Christian universities in having preserved its Christian Clause in principle, but even we cannot disregard the changes in modern values and the critical arguments arising in response to the abuses inherent in the lax application of the Clause. For this reason, the committee members, keeping such practical and philosophical matters fully within view, undertook the task of identifying positive reasons why, within the current context of crises in Christian universities, it is all the more imperative that we preserve the Christian Clause at ICU.

This Report presents the results of that reflection. At ICU there have been considerable opportunities for discussion of the ideals behind the Christian Clause both in public forums and in private circles, but this is undoubtedly the first time that a committee established by the Board of Trustees has examined from all aspects the grounds for preservation of the Christian Clause at ICU and presented its findings in report form. Compilation of such a report is most likely the first attempt of its kind not only for ICU, but for any Christian university in Japan.

2 Structure and Summary of the Final Report

1) The founding of ICU and the Christian Clause

Christian universities in Japan have retreated substantially from their original ideals which aimed at a university composed of a Christian teaching staff. The Christian Clause at ICU constituted a challenge to the vision that other universities were not able to realize; it was then and is now a daring adventure.

2) The role of educator/researcher and the Christian Clause

Liberal arts education values intellectual training as well as development of character and human nature. It follows that the character of the teaching staff as educators and researchers is of ultimate importance. The Christian Clause is meant to ensure this aspect of liberal arts education. The Christian spirit is an indispensable condition for the intercultural communication taking place at ICU,

for interaction between students or between student and faculty, for the self-discipline of faculty members, and for the very fabric of the campus community.

3) The Christian Clause as the declaration of the identity of the academic community

The Christian sense of values completely relativizes human pursuits before God, thus it repudiates the establishment of any particular values as absolute, and can help form a critical intellect in academic research. A Christian perceives the reality of human beings with a critical spirit and love for humanity, and maintains an open and praxis-oriented attitude. The clarification of the Christian sense of values, moreover, will serve to stimulate dialogues with other religions and other cultures. Since the constituent body of ICU comprises persons who have voluntarily declared their endorsement of Christian values, Christianity is the principle which is capable of uniting and binding the diverse teaching staff. The Christian Clause expresses the university's corporate identity as an academic community.

4) Principles of personnel management under the Christian Clause

Since appointments to administrative positions are acts of the university that confirm the spirit of the founding ideals, the Christian Clause should be applied to administrative appointments without exception. However, it is necessary to make the purpose of the application widely known so as to assure that it is not taken as a principle

which would alienate any regular member of the faculty from the academic community once they have been accepted. Making the composition of the general staff more Christian is another agenda that needs to be addressed.

5) Searching for and nurturing Christian candidates

It is desirable, for example, to set up a standing office to conduct surveys in order to discover young qualified Christian candidates. ICU must also not forget its duty to send young Christian teachers to other Christian universities. The Christian Clause is not simply a matter of the system, it is a matter of the voluntary commitment of the members to the spirit of the university. Christians and non-Christians alike, if fully aware of this point, will be able to pledge their understanding and cooperation with regard to the spirit and operation of the university.

Appendix

Two documents are appended to the end of the Report. "Appendix I" consists of the university regulations pertaining to the Christian clause, regulations for exceptional measures pertaining to the Christian Clause, and the record of several revisions to these regulations. "Appendix II" is a summary of the report (consisting of 19 pages in the original English) of the results of the investigation undertaken at the request of the Committee by attorney Michael Kawachi (an ICU Councillor). ICU has, since its founding, aimed at adhering to the standards of American universities. It has also modeled itself on American universities with regard to its personnel and curricular

systems. Because of this, it is not advisable to ignore legal judgments on the conditions and application of a "Christian clause" in American educational institutions these days. According to attorney Kawachi's report, even in America the application of a "Christian clause" is allowed, within an officially recognized "religious educational body." Conversely, applying a Christian clause entails the duty of conducting education based on Christian ideals.

3 The meaning of "Christian Clause"

- 1) The Christian Clause is the organizing principle which unites a diverse teaching staff in terms of its goals.

A Christian university is not a body of homogeneous members based on agreement of interests or ideologies. It is a body which seeks unity in supporting the goals of the university. Supporting the goals means consenting to Christian practices and understanding which rejects the deification of creatures and relativizes all human values and pursuits, including academic activities. Accordingly, it is the grounds for according equality to the non-Christian members who earnestly participate in those goals.

- 2) The Christian Clause requires objective expression.

Support for the goals of a Christian university is not confined to a mere subjective comprehension of the university's ideals; rather, it signifies a commitment to education and to university activities, therefore it is hoped

that teachers, on taking up their position as well as afterwards, will demonstrate their commitment via their actions as Christians. The oath sworn to upon taking up a position, as well as the appointment of Christian faculty to administrative posts, must be understood as objective expressions of the Christian Clause. If this point is taken vaguely, the Christian Clause will be perceived as "discrimination."

- 3) Preservation of the Christian Clause stimulates the formation of a critical intellect within the university.

A Christian university is not unique in its intellectual stance. Rather, a Christian university should contribute to the formation of a critical intellect befitting a "university." If the existence of a Christian clause were to produce a privileged status within the university, a university in quest of a critical intellect would end up in self-contradiction.

- 4) The principle of actions for faculty under the Christian Clause is self-discipline based on individual conscience.

In supporting the goals of a Christian university, a faculty member is first of all urged to use his or her own personal judgment, but even in their various activities after taking up their post, their independent judgments and conduct will be respected and required. In this sense, the Christian Clause presupposes high moral standards of its faculty members.

- 5) The Christian Clause gives meaning to Christian values and the decision of a university identity.

As Christian values are expressed through the love and righteousness found in Jesus Christ, their content is concretely manifest in history. These values constitute the driving force behind the establishment of Christian universities, and determines their identity. However, in an intellectual society, such as a university, a Christian sense of values works as the force which molds a critical intellect, and prevents establishing as absolute one's own value system in the face of other cultures and other religions. The intellectual tension that obtains in the preservation of one's personal sense of values while at the same time resisting its categorical absolutization is the form of intellectualism befitting a Christian university. This is what distinguishes the value system of a Christian university from an irresponsible cultural relativism with no intellectual tension or from religious pluralism. The Christian Clause urges the university to consciously assume this standpoint.

- 6) For the preservation of the Christian Clause, it is necessary to ensure a high ratio of Christian faculty members.

It is a mistake to think that only Christian faculty can support the goals of the university and commit themselves to them; in actuality, there are numerous instances of non-Christian faculty members demonstrating their outstanding commitment. However, the task of bringing the ideals of a Christian university to fruition is one that should be assumed and carried out primarily by Christian faculty. Furthermore, in order that Christian values may be at all times evident in visible form within the university, it is necessary that the majority of faculty be

Christian. As the erosion of ideals caused by secularism progresses, it becomes increasingly more difficult to rebuild Christian ideals in actual practice. Particularly in Japan, where Christianity is weak, dynamics for rebuilding Christian ideals will have no chance to take effect. Those persons involved in Christian universities must be made fully aware of this fact.

- 7) Maintaining the Christian Clause requires awareness of the position of Christians as a minority in Japan.

Because Japan is not a society in which Christians are in the majority as in the United States, Christian ideals cannot be preserved without positive intent. Thus, it is inappropriate to bring into Japanese Christian universities the issue of religious discrimination which is found in the United States, where Christians constitute a majority of the society. While attempting to model itself after top U.S. universities with regard to academics, ICU also needs to recognize the fact that it is a Japanese university and must maintain principles appropriate to its own soil.

4 Q & A

Q 1 Why was this committee established?

A 1 This committee was established by the Board of Trustees in order to substantiate the founding ideals of ICU with a thoroughgoing examination from the standpoint of the university as an academic institution, especially with reference to the varying opinions concerning the Christian Clause as they were expressed within the campus community and at meet-

ings of the Board of Trustees and Councils. The Board of Trustees carefully selected the committee members from among individuals appropriate for the task, both inside and outside of the campus.

- Q 2 This Report is titled "Final Report." Does this mean that this Report constitutes the final decision to which ICU is bound in the future?
- A 2 No, it does not. The designation "Final Report" is used solely in contrast to the "Interim Report," signifying that it is the final report from the Committee to the Board of Trustees.
- Q 3 What is the rationale, if any, for renaming the "Christian Code" the "Christian Clause?"
- A 3 The oft-used term "C-Code" obscures the original nature of the principle as the autonomous discipline of the constituents and gives rise to the impression that it is a heteronomous binding "code." The final report therefore employed a descriptive expression "Clause" as it is used, for example, in "Clause" Two of Article Seven of the "By-laws to the Acts of Endowment."
- Q 4 How do you define a "Christian?" What are the aspects of "Christian-ness" of the faculty that the report deems meaningful?
- A 4 The report avoids defining the "Christian" materially and quotes one of the formal pronouncements found in the New Testament. It is neither necessary nor desirable for this report to define the essence of "Christian-ness" that would cover all possible definitions of diverse Christian denominations and groups existing in the world. According to the quoted

passage, however, it is essential for a Christian not only to believe in heart but also to confess by mouth. The report therefore acknowledges as Christian those who have made public confession in a particular body of Christians (see "Preface"). The unity that is sought in the university is not the unity of creeds as in the Church, but the unity achieved by a common understanding of the role of Christian faith in learning and education, and affirmation of the common goal of the university based thereupon. The Christian Clause is an institutional expression of this understanding.

- Q 5 Is not the Christian Clause irreconcilable with the nature of academic inquiry?
- A 5 The report finds the essence of scholarship in the development of critical intellect, and the meaning of the Christianness of the faculty in terms of assisting and promoting this development. Standing in front of the Absolute, the Christian faculty member is expected to nurture a truly critical attitude of scholarship, disavow unbridled self-pursuit and the unreflective philosophy of "science is almighty," thus acquiring a critical reasoning capable of questioning one's own intellectual pride and authoritarianism often found in scholars and educators (see Sections 2 and 3).
- Q 6 Does not the Christian Clause make ICU an exclusive community where only like-minded people are gathered?
- A 6 As stated in Answers 3 and 4 above, the Christian Clause is meant to link the Christian faith with critical reasoning. It is not to force individual members to have specific world views. Where the Christian Clause functions properly, the community will not be homogenous or uniform. In fact, the creeds

and world views of ICU constituents have been diverse since its founding days.

Q 7 Does not the Christian Clause present an impediment to maintaining the academic standards of the faculty?

A 7 The report sees the Christian Clause as the expression of ICU's self-limitation as well as the positive principle that prevents personnel policies from being dominated by particular factionalism often found in the university recruitment process. However, the report also points out the need to make further effort in a consistent and systematic manner to recruit qualified scholars with a long-range perspective. The report makes some suggestions with regard to this point (see Sections 4 and 5).

Q 8 Is not the Christian Clause a form of discrimination based on creed as defined and prohibited by United States' civil rights legislation?

A 8 Please refer to Appendix II. The committee has consulted specialists on the matter and received legal advice to the effect that the Christian Clause does not violate the laws and statutes of Japan or the United States of America. According to recent rulings in various American states, religious educational institutions in America are urged from legal considerations as well to be more aware of and explicit about their religious commitment.

Q 9 Is ICU a university engaged in proselytism?

A 9 Proselytizing is not the goal of ICU as an educational and research institute. However, as an ICU education concerns the whole personality of students, part of its educational re-

sponsibility includes providing students with occasions to be acquainted with Christianity and to be confronted by the challenge it presents. This has been the unchanging understanding of ICU's mission beginning with its founders. "ICU is absolutely not a narrow-gauged, sectarian, proselyting institution. . . It is a Christian university in the sense that the philosophy of life it upholds is Christian and the value system it stands by is Christian. We do not propose to proselyte. You are not asked to become Christians. But we will dare to challenge you — every one of you — with the Christian way of life." (Hachiro Yuasa, from Charles W. Iglehart, *ICU: An Adventure in Christian Higher Education in Japan*, p. 281)

- Q 10 Why Christianity in this age of globalization?
- A 10 As it is Christianity that takes the initiative and leadership role in interfaith dialogue in the modern world, religious and academic dialogues can be made meaningful only when there is sincere recognition of the self-identity of the participants. To maintain the Christian Clause means therefore to provide the basis for true international and inter-religious understanding (see Section 3).
- Q 11 What will happen to the practice of exceptions to the Christian Clause, if the Clause is to be maintained in the future?
- A 11 As is stated in the Conclusion of the report, there has been an extraordinary contribution to ICU education by non-Christian faculty members employed under exceptional measures. This practice will continue to be necessary in order to maintain the academic standards of ICU education.
- Q 12 Is it the opinion of the Committee that the Christian Clause is

the only means by which to give concrete shape to the Christian spirit at ICU?

A 12 The Report considers that the Christian Clause is the minimum indispensable necessity for the embodiment of the Christian spirit which is the founding ideal of our university.

Q 13 Please comment on the various problems related to the actual application of the Christian Clause.

A 13 The Committee, as is expressed in its title, was formed to investigate "ideals." The fact that the actual application of the Christian Clause has produced various kinds of troubles is well recognized in the Report as well (see Section 4), but these problems should be resolved by a proper realization of the spirit of the Clause, and implementation consonant to the ideals. We do not think that they will be resolved through abolition of the Clause.

NOTE: On the occasion of a forum on the "Committee for the Study of ICU's Christian Ideals, Final Report" (held on October 18, 1994), the Committee prepared and distributed a "Q&A" sheet for faculty and staff. The 'Q&A' recorded here were revised and augmented after reflecting back on the questions received at the forum.

委員名簿

(* 委員長、肩書は『最終報告』のもの)

* 中川秀恭 (理事)

元本学教授・学長、大妻女子大学理事長兼学長

茅野徹郎 (総務理事)

元本田技研工業株式会社代表取締役専務

松永希久夫 (評議員)

東京神学大学教授・学長

古屋安雄 (人文科学科教授)

大学牧師、宗務部長

並木浩一 (人文科学科教授)

前大学院部長、評議員会書記

Committee Members

(*Chairperson, titles are as of publication date of the "Final Report")

*Hideyasu Nakagawa (Trustee)

Former Professor and President, ICU; Board Chairperson
and President, Otsuma Women's University

Tetsuo Chino (Managing Trustee)

Former Executive Director, Honda Motor Company Incorporated

Kikuo Matsunaga (Councillor)

Professor and President, Tokyo Union Theological Seminary

Yasuo Furuya (Professor, Humanities Division)

University Minister and Director of the Religious Center, ICU

Koichi Namiki (Professor, Humanities Division)

Former Dean of the Graduate School; Secretary, The Board
of Councillors, ICU

This publication is authorized by the Senate
on April 11, 2002.

ISSUES OF ICU

Volume 4

ICUのキリスト教理念 / The Christian Ideals of ICU

Date of Publication: December 24, 2003

発行日: 2003年12月24日

Published by
International Christian University
3-10-2 Osawa, Mitaka-shi, Tokyo
181-8585, Japan

発行所: 国際基督教大学
東京都三鷹市大沢 3-10-2
Phone: 0422(33)3005

Printed by: Sanko Printing, Co.Ltd.
3-1-10 Sakai, Musashino-shi, Tokyo
180-0022, Japan

印刷所: (株)三幸印刷
東京都武蔵野市境 3 1-10
Phone: 0422(52)1133

